

スペシャルオリンピックス日本 20年の検証

設立20周年記念調査研究報告書



スペシャルオリンピックス日本 設立 20 周年記念調査研究報告書の発行に寄せて



公益財団法人スペシャルオリンピックス日本

理事長 有森裕子

スペシャルオリンピックス日本（SON）は、1994年11月27日、熊本市を本拠地とし発足しました。知的障害のある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供という、スペシャルオリンピックス（SO）世界共通の使命の下、多様な人々が互いに尊重しあい共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進し、2014年に設立20周年を迎えることができました。

SONが活動を開始した1994年頃は、まだ、NPO法人の制度もスポーツ基本法も存在しない時代です。SOのことなど誰も知らず、活動資金も無く、スポーツや福祉の専門家もいない未知数の中でのスタートでしたが、多くの仲間や理解者に支えられ20年が過ぎ、現在では47都道府県全てにSO活動の拠点が置かれ、全国で約7,500人のアスリートと1万3千人以上のボランティアが参加するスポーツ組織に成長しました。

SONでは設立20年を迎えるに当たり、この成長を単に足跡としてとらえるのではなく、国内SO活動の効果や有益性を明らかにするための調査研究プロジェクトを2013年に発足させました。本稿、「スペシャルオリンピックス日本20年の検証～設立20周年記念調査研究報告書～」はその結果をまとめたものです。

スポーツ基本法の施行、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催等、わが国のスポーツを取りまく環境は大きな転換期を迎えています。このような時代の中、本報告書やSO活動が障害者スポーツの普及発展、あるいは今後のスポーツ行政や施策等の促進の一助となることを期待しています。ぜひ多くの皆様にご高覧いただければ幸いです。

最後に、2年にわたり本プロジェクトに携わっていただき、20周年を記念する研究報告をまとめていただいた、Team SOSの皆様にご心より感謝申し上げます。

スペシャルオリンピックス日本研究チーム (50音順) (Team SOS : Special Olympics Studies)

- 岩沼聡一郎** 帝京科学大学 / SON・東京
担当分野：アスリートの身体的効果
- 志村 健一** 東洋大学 / SON・東京
担当分野：アスリートの心理・社会的効果
- 田引 俊和** 北陸学院大学 / SON・愛知
担当分野：ボランティア、ファミリー等の心理・社会的効果
研究チーム事務局
- 仲野 隆士** 仙台大学 / SON・宮城
担当分野：アスリートの心理・社会的効果
ボランティア、ファミリー等の心理・社会的効果
- 松本 耕二** 広島経済大学 / SON・山口
担当分野：ボランティア、ファミリー等の心理・社会的効果
ナショナルゲーム記録分析
- 渡邊 浩美** スペシャルオリンピックス日本事務局長 (研究開始時)
プロジェクト立案及び研究チーム事務局

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重し合い共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。

2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 研究目的

本研究は、スペシャルオリンピックスの使命、目的、理念等で述べているスペシャルオリンピックスに参加することで得られる効果を検証することを目的とする。アスリートの心理・社会的効果に関する調査においては、アスリートとして参加している知的障がいのある人（以下、本研究におけるアスリートとは、スペシャルオリンピックスに参加している知的障がいのある人をさす）、その家族、ボランティアとして参加しているコーチやスタッフを対象とし、スペシャルオリンピックス参加の効果を多角的に検証することで、インクルーシブな社会創生への提言をねらいとした。

3. 研究概要

(1) アスリートの身体的効果に関する調査研究

スペシャルオリンピックス（以下、SO）活動がアスリートの身体に与える効果を検討するために、1）SOプログラム中の運動強度の検証と、2）プログラムに継続的に参加することでもたらされる体力面への効果の検証を行った。

SOプログラム1ターム（8週間）の前後でのアスリート（陸上競技：14名、バスケットボール：9名）の体力の変化を検討した。測定項目は長座体前屈、握力、垂直跳び、50m走であった。バスケットボールで垂直跳びが有意に向上したものの、他の項目では変化がみられなかった。陸上競技では全ての項目で変化が認められなかった。しかし、ナショナルゲームに2大会連続で陸上競技（短距離種目）に出場したアスリートの記録を見てみると、8割以上のアスリートが記録の向上あるいは維持をしていた。つまり、1タームではアスリートの体力に顕著な変化が見られなくとも、より長く継続することでアスリートの体力が向上する可能性がある。

1回のプログラムでは身体への効果が期待できる運動量・強度が確保されていたが、プログラムに継続参加することで得られる体力面への効果は1タームよりも長い時間（年単位）を要することが示唆された。

(2) アスリートの心理・社会的効果に関する調査研究

本研究は、スペシャルオリンピックスの使命、目的、理念等で述べているスペシャルオリンピックスに参加することで得られる効果を検証することを目的とする。心理・社会的効果を検証するセクションにおいては、継続的比較分析法により中核カテゴリーを創発し、アスリートがスペシャルオリンピックスに継続的に参加する実践事例の構造を可視化することをねらいとした。

コミュニケーションは知的障がいのある多くの人たちにとっての課題であり、本調査に参加したアスリートにとっても例外ではない。インタビューへの応答、日常生活におけるコミュニケーションはアスリートにとっての主たる「気がかり」である。10年以上継続してプログラムに参加しているアスリート10名からの聴き取りによって、中核カテゴリー【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピックス】(以下文脈上で【自己表現の手段】とも表記する)が浮上した。アスリートにとって、スペシャルオリンピックスは使命に記されている「勇気を表現すること」のみではない自己表現の方法であり、場であり、包括的な手段である。アスリートはスペシャルオリンピックスを通して、自己を表現し、自己表現を確認していた。すなわち、本調査の結果から、アスリートがスペシャルオリンピックスに参加することで得られる心理・社会的な効果は、【自己表現の手段】を獲得することであるといえよう。

(3) スペシャルオリンピックス活動の効果・影響

本研究はスペシャルオリンピックス活動の効果、影響を検証することを目的とする。具体的には、①スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果・影響、②スペシャルオリンピックス活動にボランティアとして参加しているコーチやスタッフ、およびファミリーの、意識の特徴を明らかにすることを目指す。

複数の地区組織からの回答(約1200件、22質問項目)を分析した結果、アスリートに対する効果・影響として「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」の3つの因子を確認することができた。また、コーチやコーチ以外のボランティア、ファミリーなど回答者自身についても、関連する25の質問項目から「身体」「社会生活」「心的・精神面」に加え、「スペシャルオリンピックス活動への共感」という因子も得た。

(4) スペシャルオリンピックス参加者の知的障害者に対する意識

スペシャルオリンピックス活動に参加している、コーチ、およびボランティアの、知的障害がある人たちに対する意識の特徴の分析を試みた。約370名の回答結果から、活動に参加している人たちは有意に前向きな評価、受け止め方をしていることが明らかになった。

スペシャルオリンピックスでのボランティア経験と知的障害者に対するポジティブな意識形成には関連性があることが確認でき、活動の基本理念で示されている「地域社会も参加、見学により、知的障害のある人々を理解し、尊敬し、受け入れるという効果がある」とも信じています。」を一つの形として示したといえる。

(5) SO活動の休止、離脱に関する調査研究

スペシャルオリンピックス活動をより意義あるものにしていくためにも活動を継続、あるいは推進していくための根拠の一つともなる課題等の分析を試みる。具体的には、スペシャルオリンピックス関係者の活動休止、および離脱の要因等に関する調査分析を行う。

一度は会員登録したものの活動を休止、離脱する要因等の検討を行った結果、大まかに参加者（回答者）側の理由に関するものと、SO組織側や活動内容に関するいくつかの因子、およびカテゴリーを確認した。関係者の意識や雰囲気の結果的にアスリートのスポーツの成果や継続性に影響を及ぼしてしまうことが懸念される。スペシャルオリンピックスの目標、理念、方針などを共有、再確認する機会を設ける、あるいは参加者などで意見、情報交換する機会を充実させるなどの工夫が求められる。

さらに、会場や移動に関する多くのニーズ、課題があることを確認した。とりわけSOに参加するアスリートたちは一人での移動に制約がともなうことが少なくない。移動や活動場所の工夫は今後、SO活動を推進していくために必要な視点だと考える。

(6) ナショナルゲーム記録分析

過去に開催されたスペシャルオリンピックス日本ナショナルゲーム（以後、NG）出場アスリートの1)競技アスリート（サンプル）の特性、2)出場種目の傾向、3)競技（予選・決勝）記録、4)大会（開催年）別記録の比較、5)大会前事前申告記録と大会記録について比較することを目的とした。具体的には夏季NG（4大会：1998 神奈川、2002 東京、2006 熊本、2010 大阪）において実施された陸上競技における937競技記録（データ）を用いて分析を行った。

各大会における出場アスリート（サンプル）の数は「東京大会」が最も多かった。性別は、男子の方が圧倒的に多く、女子は全体の20.9%で、男女比は4:1であった。

大会出場前の申告記録と大会時の記録を比較した結果、12競技種目の内、100m走、200m走、400m走、1500m走、3000m走の5種目で統計的な差がみられ、決勝記録が事前申告記録より向上していた。そのほか統計的な差はみられなかった7種目においても50m走を除く6種目でも競技記録（平均値）は向上していた。

これらの結果から、大会前のエントリー時点の記録より大会時記録が向上しており、NG大会の開催自体がアスリートのパフォーマンス（記録）を向上させている機会となり得ているといえる。

スペシャルオリンピックス日本 20年の検証

設立20周年記念調査研究報告書

目次

本報告書の目的・概要	5
1. アスリートの身体的効果に関する調査研究	10
2. アスリートの心理・社会的効果に関する調査研究	22
3. スペシャルオリンピックス活動の効果・影響	34
4. スペシャルオリンピックス参加者の知的障害者に対する意識	40
5. スペシャルオリンピックス活動の休止、離脱に関する調査研究	46
6. ナショナルゲームの記録分析	52
7. 研究まとめ	62

<参考資料>

資料1 スペシャルオリンピックスに関するこれまでの研究	64
資料2 スペシャルオリンピックスの理念	70
資料3 スペシャルオリンピックスのあゆみ	70
資料4 スペシャルオリンピックス日本のあゆみ	71
資料5 スペシャルオリンピックス日本の活動推移	73

1

スペシャルオリンピックス参加の効果 アスリートの身体的効果に関する調査研究

研究グループ（事務局長以下50音順、下線は本調査の担当者）

渡邊浩美（事務局長）、岩沼聡一朗、志村健一、田引俊和、仲野隆士、松本耕二

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重しあい共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 研究目的

本研究は、スペシャルオリンピックスの使命、目的、理念等で述べているスペシャルオリンピックスに参加することで得られる効果を検証することを目的とする。アスリートの身体的効果に関する調査においては、アスリートとして参加している知的障がいのある人（以下、本研究におけるアスリートとは、スペシャルオリンピックスに参加している知的障がいのある人をさす）を対象とし、1）スペシャルオリンピックスプログラム中の運動強度の検証と、2）プログラムに継続的に参加することでもたらされる体力面への効果の検証を行った。

3. 調査方法および結果（アスリートの身体的効果について）

（I）プログラム中の運動強度の検証

プログラム中の心拍数を測定することで、プログラム中の運動強度を検証することを目的とした。そこで本項では、1）プログラム中の各運動強度の出現率と、2）プログラム中の心拍数の変動を検討した。

【方法】

心拍数測定の対象は、陸上競技でアスリート8名（男性6名、女性2名：28 ± 16歳）、バスケットボールでアスリート4名（男性3名、女性1名：23 ± 4歳）であった。この中にダウン症を有するアスリートは含まれなかった。心拍数の測定には心拍計（RS800CX; RS400, POLAR）を用い、5秒毎に心拍数を記録した。本研究で使用した心拍計は、ベルト型の計測機を胸部皮膚上に直接装着し、腕時計型の記録機に心拍数を記録するものであった。陸上競技での測定では記録機を左手首に装着したが、バスケットボールでの測定では、ルール上、手首に記録機を装着することが許されないため、ショートパンツのポケットに記録機を挿入した。記録されたデータは専用のソフトウェア（Polar Pro Trainer 5, POLAR）を用いてパーソナルコンピュータに取り込んだ。最大心拍数（以下、HRmax）は知的障がい者を対象にした Fernhall et al. (2001) の式（ $HR_{max} = 210 - 0.56 \times a - 15.5$

× b; a: 年齢, b: 1 (ダウン症を有しない場合), 2 (ダウン症を有する場合)) を用いて推定した。運動強度の評価には、今日の運動処方でも用いられている %HRmax 法を用いた (%HRmax = (各時点での心拍数) / HRmax × 100)。心拍数から運動強度を求める方法の一つとして、安静時心拍数を考慮する方法 (カルボネン法) もあるが、本研究では測定環境の都合上、安静時心拍数を測定することが難しかったため、カルボネン法を用いなかった。結果は平均値 ± 標準偏差で示した。

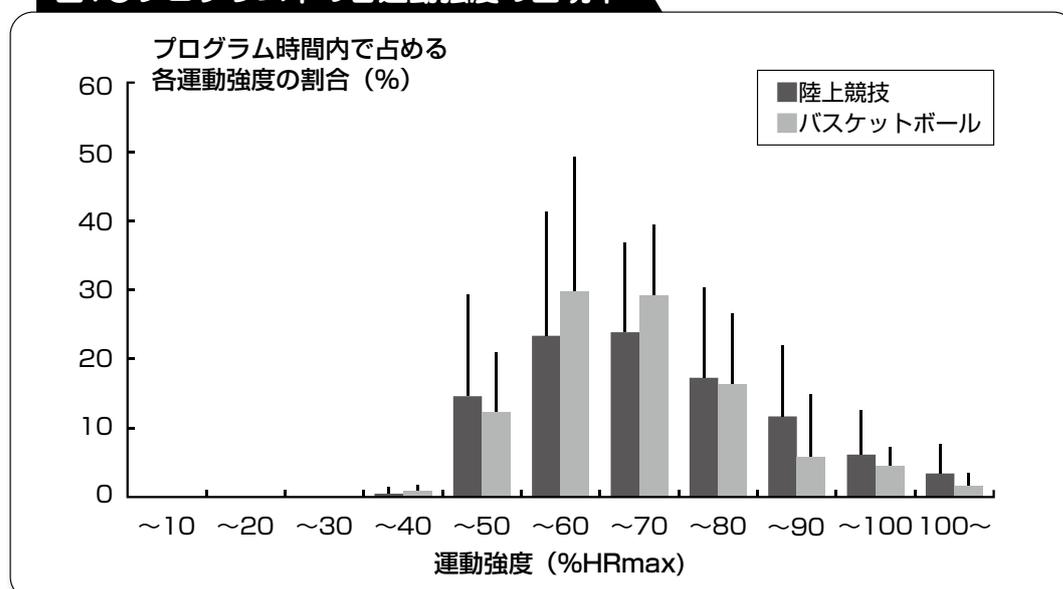
【結果および考察】

1) プログラム中の各運動強度の出現率

プログラム中の運動強度では、50 ~ 70%HRmax が頻出した (図 1)。一般的に、~60%HRmax は運動不足解消、~70%HRmax は脂質代謝の亢進 (脂肪燃焼) および心肺機能 (全身持久力) の向上、~80%HRmax は全身持久力の向上に効果的であると言われている。これを踏まえると、本研究で対象としたプログラムでは、運動不足解消、脂質代謝の亢進、全身持久力の向上を期待できる運動強度が確保されていることが明らかとなった。また、各運動強度の出現傾向は競技間で同様であった。なお、プログラムの実施時間は陸上競技で 81 ~ 120 分、バスケットボールで 99 ~ 120 分であった。

厚生労働省の「健康づくりのための身体活動基準 2013」を参照すると、18 ~ 64 歳は日常生活での身体活動に加えて、「強度が 3 メッツ以上の運動を (中略) 毎週 60 分行う」ことが推奨されている。具体的な 3 メッツ以上の運動には、ボウリング、ゴルフ (3.0 ~ 3.5 メッツ)、卓球、テニス (4.0 ~ 4.5 メッツ)、ジョギング、サッカー、バスケットボール (7.0 メッツ) が挙げられる。SO プログラムをこの「運動」に置き換えた場合、推奨される運動強度・運動量を十分に確保できるものと考えられる。

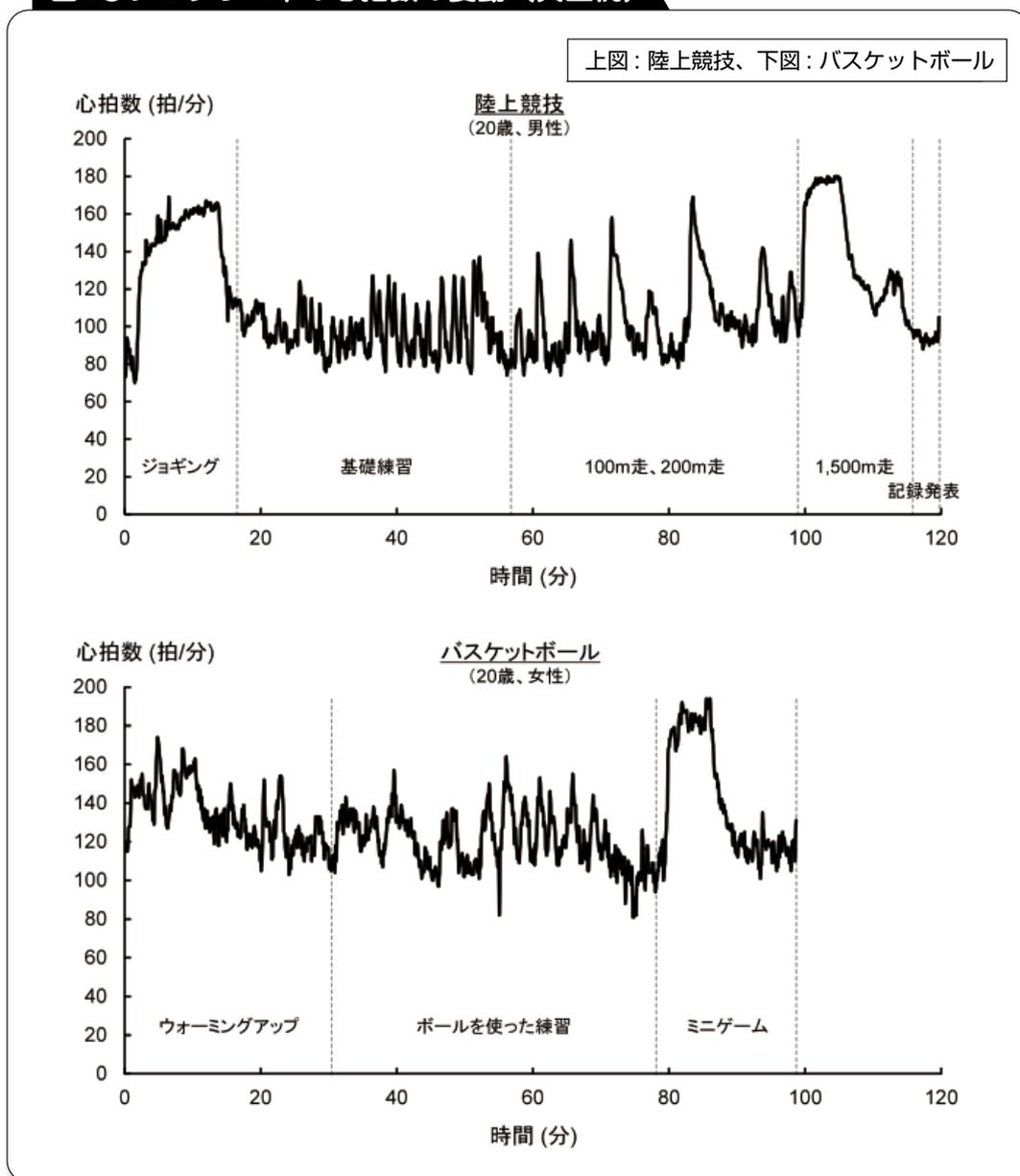
図1●プログラム中の各運動強度の出現率



2) プログラム中の心拍数の変動 (典型例)

各プログラムでは、基礎体力の向上や競技能力の向上を目指して、様々なトレーニング、練習が組み込まれている。当然のことながら、プログラム中の心拍数は一定ではなく、その時々トレーニングや練習の内容に影響を受ける。そこで、陸上競技、バスケットボールそれぞれのプログラムにおいて、心拍数の変動とプログラム内容の関連を示した(図2)。その結果、陸上競技では、心拍数がジョギング時および1,500m走時に高くなること、また短距離走の練習時に間欠的に高くなることが示された。また、バスケットボールでは、特にミニゲーム時に高くなることが示された。それぞれの時点での心拍数の高低には個人差が見られたものの、プログラム中の心拍数の変動の様相は他の対象者であっても同様の傾向であった。

図2●プログラム中の心拍数の変動 (典型例)



(Ⅱ) プログラムに継続的に参加することでもたらされる体力面への効果の検証

1ターム（8週間）の前後で体力測定を実施し、プログラムに継続的に参加することでもたらされる体力面への効果を検証することを目的とした。そこで本項では、1)アスリーの体格、体力の実態を示し、続いて2)1タームのプログラム参加がアスリーの体力に与える効果を検討した。

[方法]

体格、体力の測定は1タームの第1週目に実施した。その対象は、陸上競技でアスリート15名（男性11名、女性4名：25 ± 12歳）、バスケットボールでアスリート11名（男性8名（ダウン症のアスリート1名を含む）、女性3名：28 ± 6歳）であった。また、1ターム（8週間以上）のプログラム参加が体力に与える効果を検証するため、8週間後にも同様の体力測定を実施した。上記の対象の内、1ターム後のプログラムに参加したアスリートを対象とし、その内訳は陸上競技で14名（男性11名、女性3名：26 ± 13歳）、バスケットボールで9名（男性7名、女性2名：28 ± 6歳）であった。

体力測定の方法は次のとおりであった。握力の測定はデジタル握力計（D-3614、淡野製作所）を用いて左右2回ずつ、計4回実施した。左右それぞれの良いほうの記録を平均し、小数点以下第1位を四捨五入し、個人値とした。垂直跳びの測定はデジタル垂直跳び測定器（T.K.K.5406、竹井機器工業）を用いて計2回実施し、良いほうの記録を個人値とした。長座体前屈の測定はデジタル長座体前屈計（T.K.K.5112、竹井機器工業）を用いて計2回実施し、良いほうの記録を個人値とした。長座体前屈では適正な測定姿勢（測定中に膝を曲げない、など）がとれない場合は記録を0cmとした。50m走の測定は、陸上競技のアスリートのみを対象とし、ストップウォッチを用いて計2回実施した。良いほうの記録を個人値とした。握力、長座体前屈、50m走の測定方法の詳細は「新体力テスト実施要項（文部科学省，1999）」を参考にし、垂直跳びの測定方法の詳細は「新・日本人の体力標準値Ⅱ（首都大学東京体力標準研究会，2007）」を参考にした。

アスリーの体格、体力の実態を示すために、日本人の体格、体力の全国標準値（障がいをもたない）との比較を行った。思春期以後の体格、体力は、性および年齢によって個人差が生じることから、同性、同年齢での体格、体力の全国標準値と比較した。身長、体重、握力、長座体前屈の全国標準値には「体力・運動能力調査（文部科学省，2013）」を採用し、垂直跳び、50m走の全国標準値には「新・日本人の体力標準値Ⅱ（首都大学東京体力標準研究会，2007）」を採用した。50m走の全国標準値は男性で39歳まで、女性で29歳までであったことから、その年齢を超えたアスリートについては50m走の記録を全国標準値と比較しなかった。

1タームのプログラム参加が体力に与える効果の検証では、1ターム前後に測定した記録を比較するために、競技別に各測定項目で対応のあるt検定を行った。結果は平均値 ± 標準偏差で示し、有意水準は0.05未満とした。

[結果および考察]

1) アスリートの体格、体力の実態：全国標準値（障がいをもたない者）との比較

男性アスリートの体格は身長、体重ともに全国標準値と同程度であった。一方、女性アスリートは身長が全国標準値と同程度であったものの、体重が全国標準値を上回る傾向にあった。身長、体重を基にBMI（ $(\text{体重}) / (\text{身長})^2$ ）を算出した。国際的には、BMIは22が最も統計的に病気にかかりにくいとされ、18.5未満が痩せ、18.5～25が正常範囲、25～30が過体重、30以上が肥満とされている（注：本邦では日本肥満学会の基準（2011）で25以上が肥満（I度）に分類される）。本研究の対象の分布は、男性アスリートでBMI18.5未満が16%、18.5～25が63%、25以上が21%で、女性アスリートでBMI18.5未満が14%、18.5～25が43%、25以上が43%であった。SO国際本部（SOI）のヘルスプロモーションデータベースを基に世界のSOアスリートのBMIを調べた研究（Temple et al., 2014）によると、アジアパシフィック（日本を含む）のSOアスリートはBMI18.5未満が約2割、18.5～25が約4割、25以上が約4割であり、本研究と同様の分布であった。一方、北米のSOアスリートの7割がBMI25以上にある（Foley et al., 2013; Temple et al., 2014）。アメリカと日本でBMIの結果が異なるのは日常の生活習慣（食習慣や運動習慣、生活スタイル）の違いが特に関連していると考えられるが、本邦のアスリートが極度に高いBMIを呈していないことは好ましいことと言えよう。

握力は筋力の指標である。本研究では、女性アスリートが全国標準値と同程度であった一方で、男性アスリートが全国標準値よりも低い傾向にあった。アメリカのSOアスリート（9～50歳男女103名）を対象にした研究（O'Connell et al., 2006）、スペインのSOアスリート（31 ± 8歳男女266名）を対象にした研究（Cuesta-Vargas et al., 2011）によると、男性アスリートの平均が29.1 kg、28.7 kgで、女性アスリートの平均が19.3 kg、17.0 kgであった。一方、本研究では男性アスリートの平均が30.2kgであり、女性アスリートの平均が25.3 kgであった。人種や体格が異なり比較が難しいため、アメリカのSOアスリートの握力について、アメリカの標準値（Mathiowetz et al., 1985）に対する相対値を算出したところ、アメリカの男性アスリートの握力は65%で、女性アスリートは73%であった。本研究の結果（図3）と比べると、男性アスリートはアメリカの男性アスリートと同程度の相対値であったが、女性アスリートはアメリカの女性アスリートより高値を示した。先行研究によると、知的障がい者は障がいのない者よりも筋力が低い（Angelopoulou et al., 1999; Croce et al., 1996; Horvat et al., 1999）。本研究の結果はおおむねそれを支持するものであるが、本研究で対象とした女性アスリートの中には全国標準値より高い握力を示す者も複数名いたことは特筆すべきである。

垂直跳びおよび50m走はパワー（瞬発力）と巧緻性の指標である。いずれの測定項目も、男女ともに全国標準値を下回る結果であった。この結果は知的障がい者が障がいのない者と比べて垂直跳びのジャンプ高が低いという報告（Hassani et al., 2013, 2014; Skowronski



et al., 2009) を支持する結果であった。パワーは力学的に力と速度の積（掛け算）と定義される。前述のとおり、知的障がい者は筋力が低い傾向にある。また、動作速度や効率的なパワー発揮には巧みな動きが影響する。Hassani et al. (2014) は、知的障がい者が垂直跳びの際に共収縮の割合が高いこと（ジャンプしようとはたらく筋の活動に対して、反対側で拮抗する筋の活動も高いこと）や、反動のつけ方（膝関節を曲げる速度や角度）が未発達であることを報告している。50m 走についても同様のことが推察される。走速度はストライド（一步の長さ）とピッチ（一步一步の頻度）によって決定される。ストライドを確保するにはパワーが必要であり、ピッチを確保するためには脚の素早い引き付けと振り出しが必要である。したがって、垂直跳びおよび 50m 走で見られた結果には、筋力面と技術面の両方が関係していたと考えられる。

長座体前屈は柔軟性の指標である。女性アスリートの平均は全国標準値と同程度であり、個人値を見ても女性アスリートのほとんどが全国標準値 $\pm 2SD$ 以内に含まれていた。一方、男性アスリートは全国標準値を上回る者も複数名いたが、多くが全国標準値を下回り、中には記録なしの者もいた。知的障がい者は障がいのない者に比べて股関節の可動性（柔軟性）が低いという報告（Angelopoulou et al., 1999）があり、本研究の結果はそれを支持した。ただし、特に本研究で記録なしであった男性アスリートの場合、測定を実施した筆者の主観では、長座体前屈の測定姿勢や試行動作をとることが難しいように感じられ、必ずしも関節内の組織の硬さが結果に反映されているとは言い難かった。渡邊ら (2014) は、特別支援学校で新体力テストを実施する際に、教師が実施困難と感じる種目の中で長座体前屈が第 1 位であったと報告している。柔軟性の評価法には徒手抵抗によって関節可動域を計測する方法もあり、今後は長座体前屈に加え他の評価法も併せて、アスリートの柔軟性を検討していくことが望まれる。

図3●体格、体力に関する各測定値の全国標準値に対する相対値

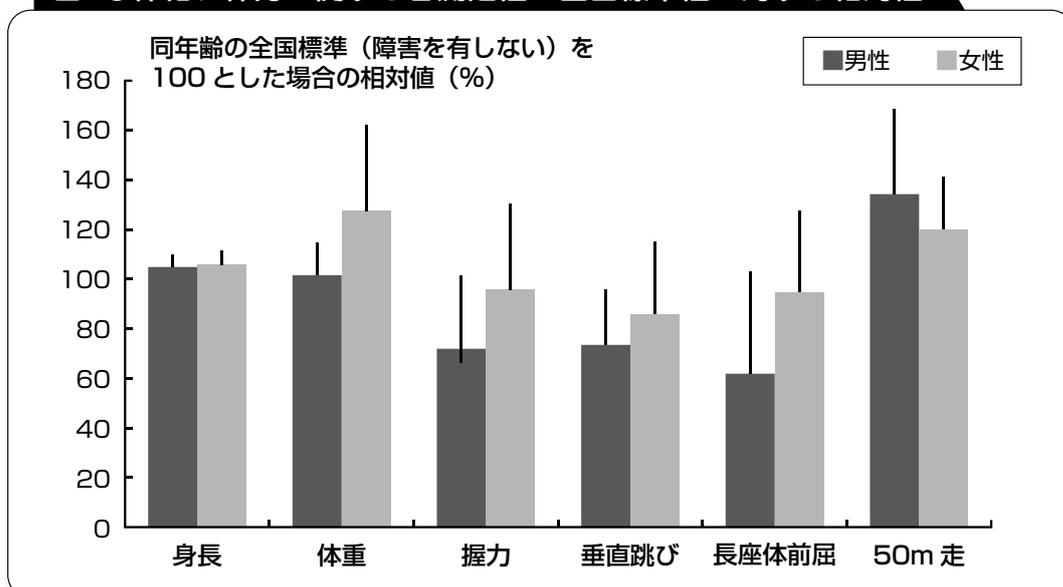
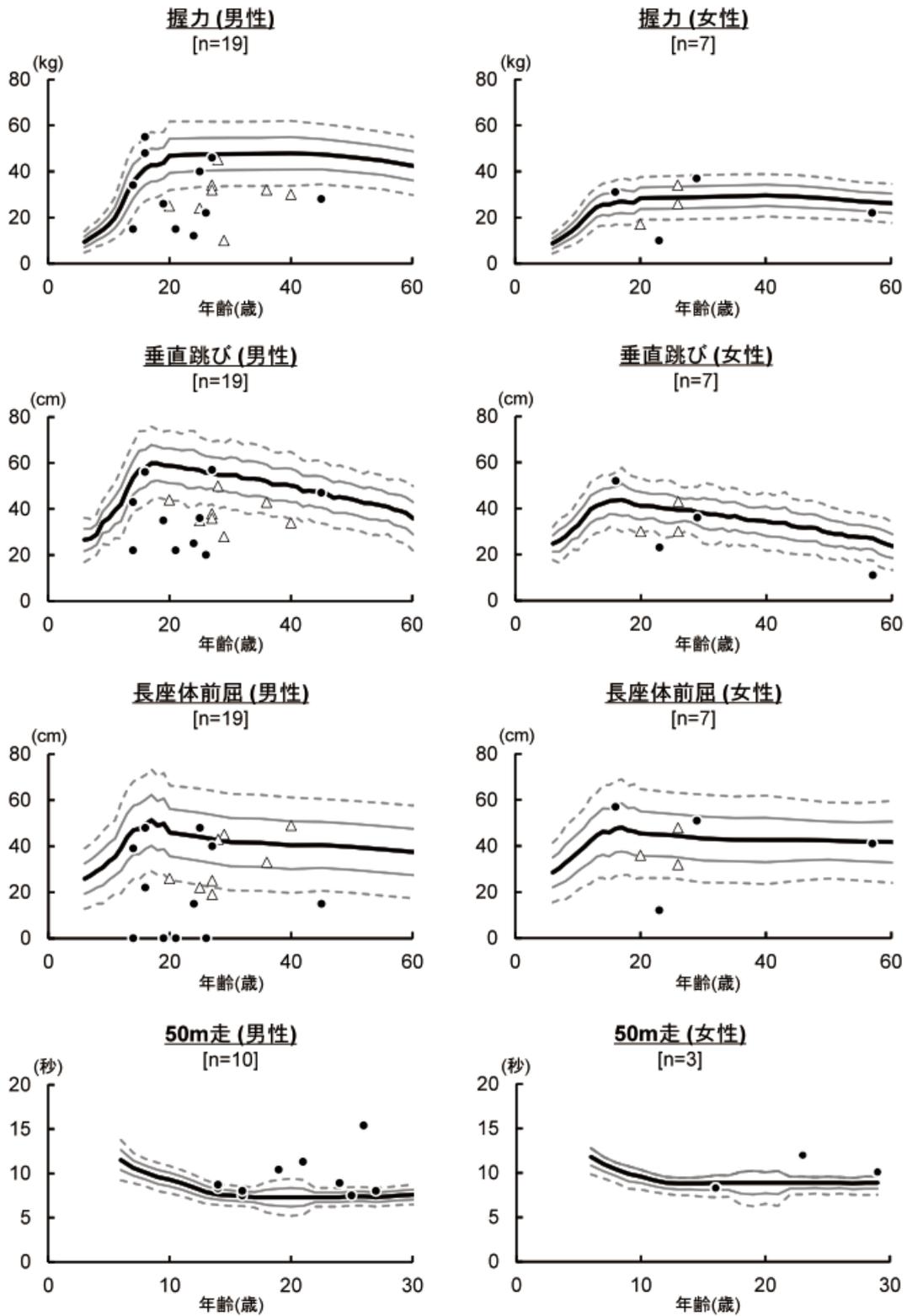


図4●アスリートの体力測定値と全国標準値（障がいをもたない）の比較



●: 陸上競技 △: バスケットボール 太線: 全国標準値 細線: ±1SD 破線: ±2SD (SD: 標準偏差)

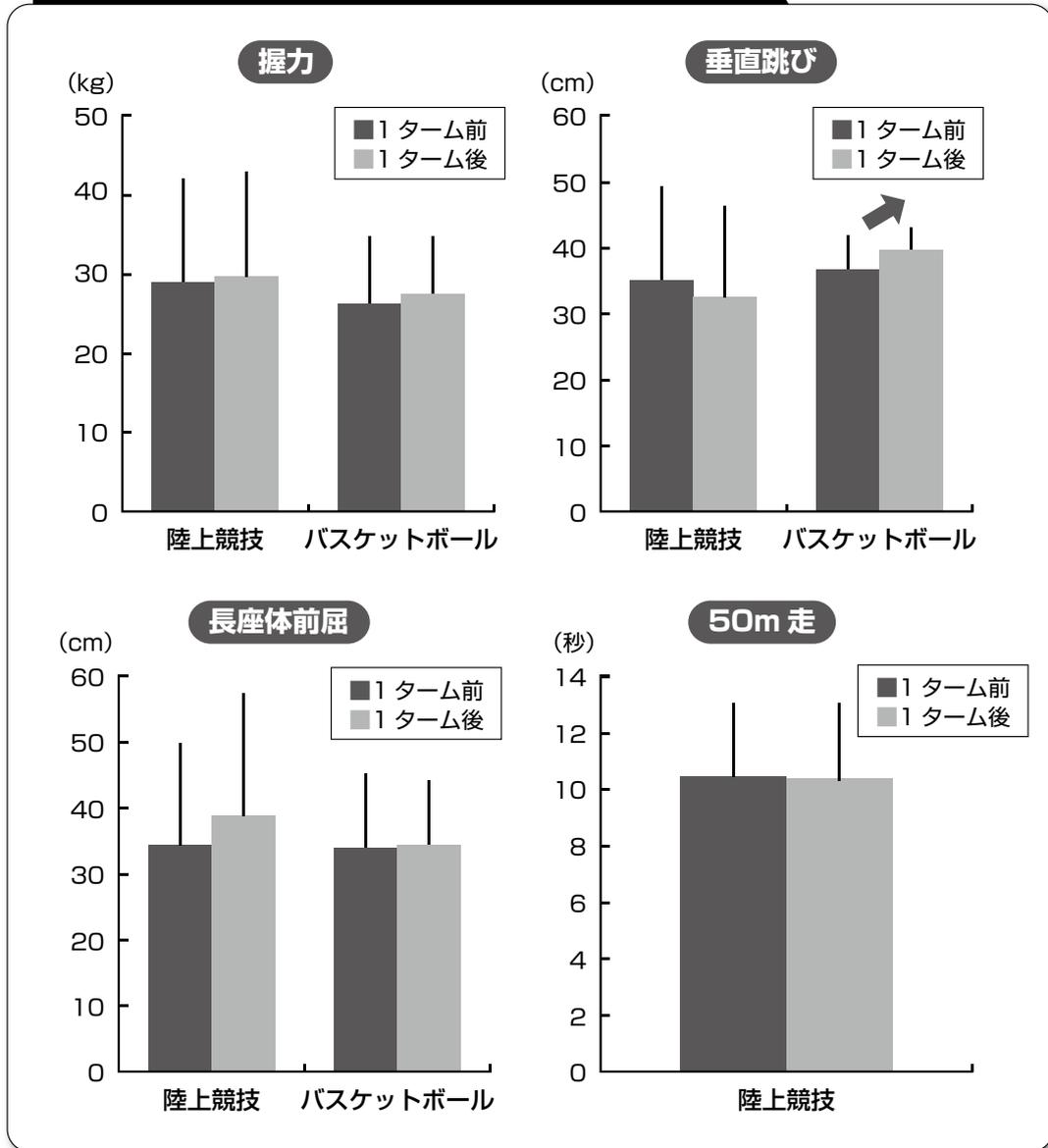
2) 1タームのプログラム参加が体力に与える効果

1タームのプログラム参加は、本研究で用いた体力測定項目のほとんどで変化をもたらさなかったが、バスケットボールでのみ垂直跳びが有意に増加した（図5）。垂直跳びは、バスケットボール競技中に多用される上方向へのジャンプと類似した動作である。例えば、ランニングシュートやジャンプシュートの時や、ゴール下でリバウンドを取る時などがある。このような動作をプログラム内の練習で繰り返したことで、結果として垂直跳びの結果が変化したと考えられる。

SOアスリートを対象にし、トレーニングの身体面への効果を検証した先行研究について紹介する。一つ目は、週2回、12週間の筋力トレーニング（1回あたり約50分）を実施した結果、拳上重量が有意に増加した（Machek et al., 2008）、というものである。二つ目は、週3回、8週間のユニファイド・サッカープログラム（1回あたり約90分）を実施した結果、握力、立幅跳び、懸垂、上体起こし、個人技能が向上し、プログラム内の活動量が有意に増加した（Baran et al., 2006, 2013）、というものである。これらの研究ではいずれも週2～3回のプログラムを実施していた。本研究において各体力測定項目で顕著な変化が見られなかった要因の一つとして、プログラムの実施頻度が考えられる。しかし、ここで挙げた二つの先行研究のプログラム環境は恵まれたものであり、一つ目の研究では学校内でプログラムを実施しており、二つ目の研究では放課後の実施であったが、学校→プログラム会場→自宅の送迎が提供されていた。本邦においてプログラムの開催頻度を増加させるためには環境面（社会面）での議論、支援が必要になると思われる。

本研究では陸上競技（短距離）のパフォーマンスの一指標である50m走において、1タームでの顕著な変化が認められなかった。しかし、SOアスリートの競技パフォーマンスの向上には個人差があり、アスリートの中には地道にプログラムに参加し続け、年単位の長い時間をかけて向上する者も少なくない。そこで、過去のナショナルゲーム（2002年東京、2006年熊本、2010年大阪）の短距離種目（50m走、100m走、200m走、400m走）の決勝記録を参照し、個人内での変化を検討した。その結果、2大会連続で同種目に出場したアスリートは12名で、そのうち7名で記録の向上が見られた。残りの5名のうち3名も前大会と1秒以内の差にあり、当日のコンディションによる記録への影響を考慮すると、2大会連続で出場したアスリートのほとんどが、記録の向上あるいは維持していたことが伺える。また、上記の12名のアスリート以外でも、前大会よりも走行距離が長い種目へ転向し、次大会に出場していたアスリートも複数名いた。SO活動においては、1タームでの体力の変化を評価することに難しさがあるが、長い年月をかけ継続することで記録が向上することが示唆された。ゆえに、継続的に評価し続け、その変化を長期的に追跡していく必要性が示された。

図5●1タームのプログラム参加が体力に与える効果



4. 調査の限界

本調査における限界として、対象者が少なかったことが挙げられる。特に、ダウン症を有するアスリートのデータが少なかった。ダウン症を有する知的障がい者は、全身持久力およびHRmaxが低く、関節の弛緩性（ゆるさ）が高い、と言われている（Angelopoulou et al., 1999; Baynard et al., 2008）。SOアスリートの中にはダウン症を有するアスリートは少なくない。それゆえ、今後はダウン症を有するアスリートに関してもデータを取得し検討していく必要がある。

また、本研究内の1タームのプログラム参加による身体面への効果の検証では、評価項目の中に、全身持久力と個人技能（スキル）に関する評価項目が含まれなかった。競技パフォーマンスを決定する因子は、体力面、技能面、心理面である。今後は全身持久力と個人技能（スキル）、加えて集団技能（チームプレー）に関しても評価を行う必要がある。

5. 終わりに

知的障がい者の体力、トレーニング効果を検証した研究は、障がいを有しない者を対象にした研究に比べて格段に少ない。特に本邦の研究者による研究報告（論文）数はアメリカに比べて乏しい。本邦においても知的障がい者の体力、トレーニング効果に関する研究を推進させることは、SO活動の実態を明らかにし、より質の高いプログラムを提供することにつながると考えられる。

本研究は趣旨にご賛同いただいた地区組織、アスリート、コーチ、ファミリーのご協力により実施でき、貴重なデータを取得することができた。SO活動の振り返りということにとどまらず、本邦における知的障がい者の体力、トレーニング効果を示した研究として意義深い。文部科学省が毎年実施する「体力・運動能力調査」では、学齢期は学校にて、成人以後は各地の教育委員会にて測定が実施される。特別支援学校における同測定の実施率（小学部：16.2%、中学部：34.4%、高等部：58.9%；渡邊ら、2014）は、一般校（約8割）に比べて顕著に低い。全国各地で幅広い年齢層の知的障がい者が参加するSO活動で、本研究のような体力測定を今後も実施していくことは、SO活動のみならず、国内の知的障がい者の健康づくりにも寄与できる可能性がある。ただし、今後もSOアスリートの体力測定を継続的に実施していくためにはマンパワーが必要である。改めて、本研究にご協力いただいた皆様に感謝を申し上げますとともに、今後さらに多くの方々がSOに関する研究にご協力いただけるようお願いする次第である。

参考文献

- Angelopoulou N, Tsimaras V, Christoulas K, Mandroukas K. (1999) Measurement of range of motion in individuals with mental retardation and with or without Down syndrome. *Percept Mot Skills*. 89(2): 550-6.
- Baran F, Özer D, Astar B, Orhan I. (2006) Special Olympics Unified. Sports: Physical activity level changes in male athletes during a soccer session. *Res Q Exerc Sport*. 77: A-37.
- Baran F, Aktop A, Özer D, Nalbant S, Ağlamış E, Barak S, Hutzler Y. (2013) The effects of a Special Olympics Unified Sports Soccer training program on anthropometry, physical fitness and skilled performance in Special Olympics soccer athletes and non-disabled partners. *Res Dev Disabil*. 34(1): 695-709.
- Baynard T, Pitetti KH, Guerra M, Unnithan VB, Fernhall B. (2008) Age-related changes in aerobic capacity in individuals with mental retardation: a 20-yr review. *Med Sci Sports Exerc*. 40(11): 1984-9.
- Croce RV, Pitetti KH, Horvat M, Miller J. (1996) Peak torque, average power, and hamstrings/quadriceps ratios in nondisabled adults and adults with mental retardation. *Arch Phys Med Rehabil*. 77(4): 369-72.

- Cuesta-Vargas AI, Paz-Lourido B, Rodriguez A. (2011) Physical fitness profile in adults with intellectual disabilities: differences between levels of sport practice. *Res Dev Disabil.* 32(2): 788-94.
- Fernhall B, McCubbin JA, Pitetti KH, Rintala P, Rimmer JH, Millar AL, De Silva A. (2001) Prediction of maximal heart rate in individuals with mental retardation. *Med Sci Sports Exerc.* 33(10): 1655-60.
- Foley JT, Lloyd M, Temple VA. (2013) Body mass index trends among adult U.S. Special Olympians, 2005-2010. *Adapt Phys Activ Q.* 30(4): 373-86.
- Hassani A, Kotzamanidou MC, Fotiadou E, Patikas D, Evagelinou C, Sakadami N. (2013) Neuromuscular differences between boys with and without intellectual disability during squat jump. *Res Dev Disabil.* 34(9): 2856-63.
- Hassani A, Kotzamanidou MC, Tsimaras V, Lazaridis S, Kotzamanidis C, Patikas D. (2014) Differences in counter-movement jump between boys with and without intellectual disability. *Res Dev Disabil.* 35(7): 1433-8.
- Horvat M, Croce R, Pitetti KH, Fernhall B. (1999) Comparison of isokinetic peak force and work parameters in youth with and without mental retardation. *Med Sci Sports Exerc.* 31(8): 1190-5.
- 厚生労働省 . (2013) 健康づくりのための身体活動基準 2013.
- Machek MA, Stopka CB, Tillman MD, Sneed SM, Naugle KE. (2008) The effects of a supervised resistance-training program on Special Olympics athletes. *J Sport Rehabil.* 17(4): 372-9.
- 文部科学省 . (1999) 新体力テスト実施要項 .
- 文部科学省 . (2013) 平成 24 年度体力・運動能力調査報告書 .
- 日本肥満学会 . (2011) 肥満症診断基準 2011.
- O'Connell JK, Rutland MK, O'Connell DG. (2006) Grip strength of Texas Special Olympians. *Percept Mot Skills.* 102(2): 461-6.
- 首都大学東京体力標準研究会 . (2007) 新・日本人の体力標準値 II . 不昧堂出版 .
- Skowronski W, Horvat M, Nocera J, Roswal G, Croce R. (2009) Eurofit special: European fitness battery score variation among individuals with intellectual disabilities. *Adapt Phys Activ Q.* 26(1): 54-67.
- Temple VA, Foley JT, Lloyd M. (2014) Body mass index of adults with intellectual disability participating in Special Olympics by world region. *J Intellect Disabil Res.* 58(3): 277-84.
- 山地 啓司 . (2013) ころとからだを知る心拍数 . 杏林書院 .
- 渡邊 貴裕, 橋本 創一, 菅野 敦 . (2014) 知的障害特別支援学校の体育・スポーツ指導における体力・運動能力調査の実際と課題 . *発達障害研究.* 36(2): 196-208.

2

スペシャルオリンピックス参加の効果 アスリートの心理・社会的効果に関する調査研究

研究グループ（事務局長以下50音順、下線は本調査の担当者）

渡邊浩美（事務局長）、岩沼聡一郎、志村健一、田引俊和、仲野隆士、松本耕二

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重し合い共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 研究目的

本研究は、スペシャルオリンピックスの使命、目的、理念等で述べているスペシャルオリンピックスに参加することで得られる効果を検証することを目的とする。アスリートの心理・社会的効果に関する調査においては、アスリートとして参加している知的障がいのある人（以下、本研究におけるアスリートとは、スペシャルオリンピックスに参加している知的障がいのある人をさす）、その家族、ボランティアとして参加しているコーチやスタッフを対象とし、スペシャルオリンピックス参加の効果を多角的に検証することで、インクルーシブな社会創生への提言をねらいとした。

3. 調査方法（アスリートの心理的、社会的効果について）

（1）データ収集の方法

- ①スペシャルオリンピックスにアスリートとして10年以上参加している知的障がいのある人を機縁法的にインタビューした。対象が最多様サンプルになるよう地区組織を選定し、質問項目については、開かれた質問（オープンクエスチョン）を原則としつつ、理論的サンプリングに従って限定化した。
- ②インタビューの協力は任意であり、対象者の意思が尊重され、インタビュー時間は一回につき最大90分とした。
- ③インタビューは対象者から同意を得て、ICレコーダーで録音した。

（2）倫理的配慮

本研究は東洋大学大学院福祉社会デザイン研究科研究等倫理審査の承認を得て実施した。

（3）データ分析の方法

継続的比較分析法により中核カテゴリーを創発し、アスリートがスペシャルオリンピックスに継続的に参加する実践事例の構造を可視化する。

(4) 調査実施状況と対象アスリート

本調査の対象となったアスリートは10名(表)である。なお、参加年数を記載することで本人が特定される可能性があるため調査時期、地区、性別に留めた。全員が10年以上スペシャルオリンピックに継続して参加しているアスリートであり、調査時における平均参加年数は17.7年(n=10)であった。また、調査時における平均年齢は36.6歳であるが、年齢を開示したアスリートは6名である。

表●調査状況一覧

調査時	地区	性別
2012年1月	北海道	女性
2012年11月	徳島	男性
2013年2月	熊本	女性
2013年2月	熊本	男性
2013年11月	東京	男性
2013年12月	東京	男性
2014年1月	東京	女性
2014年8月	宮城	女性
2014年8月	宮城	男性
2014年8月	宮城	男性

4. 結果

継続的比較分析によって中核カテゴリー【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピック】(以下文脈上で【自己表現の手段】とも表記する)が浮上した(図参照)。アスリートにとって、スペシャルオリンピックは使命に記されている「勇気を表現すること」のみではない自己表現の方法であり、場であり、包括的な手段である。アスリートはスペシャルオリンピックを通して、自己を表現し、自己表現を確認していた。すなわち、本調査の結果から、アスリートがスペシャルオリンピックに参加することで得られる心理・社会的な効果は、【自己表現の手段】を獲得することであるといえよう。カギカッコ内の斜体表記はアスリートの表現によるものである。

(1)【自己表現の手段】の概要

①コミュニケーションという課題

コミュニケーションは知的障がいのある多くの人たちにとっての課題であり、本調査に参加したアスリートにとっても例外ではない。インタビューへの応答、日常生活におけるコミュニケーションはアスリートにとっての「気がかり」であり、インタビューの依頼時においても保護者から「ちゃんと受け答えができるか不安」といった危惧が表明された。(本調査においては、地区組織への依頼時に言語によるコミュニケーションが可能なアスリートの日程調整というリクエストを送っていたため、表に記したインタビューが成立している。)

言語によるコミュニケーションには幅がある。閉ざされた質問(クローズドクエスチョン)、いわゆる、「はい」「いいえ」で答えられる質問への応答も言語によるコミュニケーションであるし、それでは答えられない開かれた質問について、流暢に自己表現する応答も言語によるコミュニケーションである。調査実施時における観察等から、アスリートにとって言語によるコミュニケーション、特にメッセージの送り手としての役割は、嫌いではないが得意とするものではないことがパターンとして浮上した。開かれた質問によるインタビューの質問を理解しても、その応答に時間がかかるだけでなく、会話のつながりに「何と言うの」といった類の言葉を探して欲しいメッセージを発することや、同席した家族やコーチに回答を求めるようなケースが幾度かあったことは事実である。

②課題克服の手段

知的障がいのある人たちがコミュニケーションという課題を克服するにあたっては、さまざまなアプローチが存在している。生活や作業を構造化、可視化する取り組みもそのアプローチの一つであろうし、また、音楽や芸術作品を通じた自己表現も一つのアプローチであろう。昨今ではタブレット PC を利用したコミュニケーション等の開発、応用が進められている。

スペシャルオリンピックスの培ってきた文化・環境は、「アスリート・ファースト」の理念を掲げ、一貫して知的障がいのある人たちへのエンパワメントの促進に向けた支援を実践してきたものといえる。その実践はアスリートにとって「居心地のよい場」であり、そういった場での自己表現は、単なる意思表示に留まらない意義がある。すなわちスペシャルオリンピックスは、アスリートにとって主たる課題であるコミュニケーション、特に自らの意思、感情を表現するための場、機会、方法であり、より包括的に【自己表現の手段】であった。

③【自己表現の手段】が成立する要因と条件

広辞苑(第6版)によれば「手段」とは、「目的を達成するための具体的なやり方。てだて。」であり、本論での手段とは、方法、アプローチにとどまらず、ツールであり、場の意味も含む。アスリートがスペシャルオリンピックスを【自己表現の手段】とするためには、年に一度の大会や競技会だけでは不十分であり、アスリートが手段を入手し、てだてをマスターするための継続的な参加が不可欠な要因となる。本調査では平均活動年数が17.7年であり、サンプリングの要件として10年以上の参加と設定したため、【自己表現の手段】を成立させる要因として、本研究においてはカッコ付きで[(10年以上の)継続的な参加]を提示しておきたい。

スペシャルオリンピックスが【自己表現の手段】として成立するには、[コーチからのサポートイブなかかわり]が条件となる。[サポートイブなかかわり]は「優しいかかわり」「適切な指導」「見通しを示す」といった側面から構成される。一言で表現するなら「[サポートイブなかかわりは]練習や大会に関する見通しを示し、適切な指導を展開しつつ、優しくかかわること」である。

アスリートはこれから自分に何が期待されているのかに答えようとする。その際に目標や、スケジュールなど見通し示されることによって、より安心して参加することが可能となる。また、スポーツの活動に参加しているからには、うまくなりたい、早くなりたいといった欲求があり、その欲求を充足させるために、適切な指導を希求している。「適切な指導」に関するポイントはコーチクリニック等でコーチに伝達されているものに相当するだろう。コーチたちの優しさは、どのアスリートにも共通するものであったが、優しさだけでは[サポートイブなかかわり]は完結せず、三側面がともなった[サポートイブなかかわり]が前提条件となり、スペシャルオリンピックスがアスリートにとっての【自己表現の手段】となる。

(2)【自己表現の手段】の三側面

スペシャルオリンピックスはアスリートにとって【自己表現の手段】であり、[自己表現の身体的側面][自己表現の心理的側面][自己表現の社会的側面]の三つの側面を含有している。本調査では、三側面の関連性や優位性等は十分に明らかにすることはできなかったが、これらの側面はスペシャルオリンピックスの活動を日本で展開するにあたって同様に重要視してきた分野であった。言語化するにあたっては各側面を独立させる形となるが、三側面は相互に関連して存在する。アスリートの語りを継続的に比較分析した結果、これらは【自己表現の手段】の側面として浮上したカテゴリーとなった。

① [自己表現の身体的側面]

本調査はスペシャルオリンピックスの心理・社会的効果を言語化するものであり、身体的側面に関しては本研究の別の調査が担う部分であるが、[自己表現の身体的側面] についても【自己表現の手段】を構成する一側面であり、ここでは【自己表現の手段】の視座から言及してみたい。

i. 「表現としてのスポーツ」

アスリートはスポーツを通じて自己表現し、それ以前にスポーツを選択すること自体が自己表現でもあった。スポーツの特性によって生じる差や、自己表現の内容の違い等が存在するが、本調査では十分に言及することまではできなかった。

「表現としてのスポーツ」には二つのステージが存在する。第一のステージはスポーツへの自発的な選択と参加である。多くの場合、スペシャルオリンピックスの活動へ参加するきっかけは家族や知人を介して提供されるが、それ以降の参加はアスリートの意志に基づくものとなる。

ほとんどのケースで、アスリートは複数のスポーツをかけ持ちしながら参加している状況を経験していた。特にスペシャルオリンピックスへの参加当初はいくつものスポーツに参加する傾向があり、これはどのスポーツが自分の表現の手段としてフィットするのかといった「種目のショッピング」であるといえよう。体力、時間、経済的負担（交通費など）が許す限り「いろいろな種目（スポーツ、プログラム）に挑戦してみる」傾向が散見された。「種目のショッピング」の結果、フィットするスポーツを確定するが、継続的に複数のプログラムに参加することも多い。

参加、不参加という状況はアスリートの選択によってなされるものであるが、長期にわたる同一スポーツへのコミットメントは、自発的な選択と参加によるものといえよう。「最初のころはやっていただけ、合わないからやめちゃった」「行かなくなっちゃった」といった類のコメントであるが、言い換えれば、結果として長期の参加となっているスポーツは、アスリートの自発性によって選択され、継続的に参加している結果になっている。「お母さんがうるさいからやめた」というコメントは、家族からの情報提供が当初の参加のきっかけとなっていたとしても、継続という観点ではそれよりも自らの意志による参加が優位であることを示唆している。

選択の理由にはスポーツの特性が関与し、「○○（スポーツの種目名）は気持ちいいから」「面白いから」といった身体的側面と心理的側面が関連しており、明確な切り分けは困難であるが、当該スポーツの身体的側面のフィット感が長期にわたる選択の理由であると考えられた。

第二のステージは、スポーツの特性を通じた自己表現のステージである。当該スポーツに備わる特性は、自己表現にフォーム（かたち）を与える。体操はその代表的なスポーツ

であり、スポーツ活動そのものが自己表現になる。ボウリングなどでも「カッコいいフォーム」で投げることは、そのスポーツに入り込み、「カッコいいフォーム」に「カッコいい自分」を重ね合わせているわけである。フロアホッケーのシュートやパスについても、同様の括りが可能であろう。

インタビュー時の「うまい」「へた」という表現には、「カッコいい」「カッコわるい」という意味が含まれており、スポーツを通じた身体表現で「カッコいい自分」になれることは、当該スポーツにコミットする一要素である。「うまい」「カッコいい」の結果が、スポーツそのものの結果であるスコアや得点に関連することが推測できるため、本人の感覚としての「うまい」「カッコいい」についても[身体的側面]を構成する要素であると捉えることにした。

ii. 「表現としての身体活動」

スペシャルオリンピックスはアスリートに身体活動の機会を提供し、その活動が自己表現の一側面になっていることは前述したとおりであるが、アスリートの多くはプログラムの外でも「身体を動かすようになった」という。これは、プログラムに参加することと関連する個人的な活動であり、一人で行ったり、家族で行ったりする活動である。

スポーツという括りに入れ込まず、身体活動としての括りを残したのは、これらの事象がスポーツとして意識化されていないことによる。特に家族からの発言として「体力の維持、向上」に関連するものがあつたが、当該スポーツとの関連性が不明瞭なものも多く、単に身体活動とした。しかしこれらの身体活動もアスリートにとっては表現であり、プログラムへの予習や復習の機会になっている。「表現としての身体活動」は、散歩やジョギング、入浴前の腹筋から、日本舞踊などの幅広い活動が含まれる。

日常活動に身体活動が組み込まれている場合は、それが「体力の維持、向上」に寄与することが期待できるが、アスリートのコメントからは、プログラムのための身体活動の要素が意識化された。「プログラムをがんばりたいから」「上手になりたいから」と日常ベースの身体活動を行っており、「～したい」は明確なメッセージ、表現として確認でき、その表現方法として身体活動を行っているといえよう。

② [自己表現の心理的側面]

[自己表現の心理的側面]と[自己表現の社会的側面]を明確に区別することは困難であり、多くのインシデントが両面に関わっていた。しかしながら表現が自分に向かうパターンと、他者へ向かうパターンは確認することができ、前者を[心理的側面]、後者を[社会的側面]とカテゴライズした。広辞苑(第6版)によれば、表現とは、「心的状態・過程または性格・志向・意味などを総じて内面的・精神的・主体的なものを、外面的・感情的形象として表すこと」とされている。すなわち、表現は内から外へ向かうことが前提であ

るが、「自問自答」のように自ら問いかけ、応ずること行為の存在を否定することはできないだろう。

スペシャルオリンピックスの使命として掲げられている「勇気を表現すること」は、このカテゴリーの代表として存在している。インタビューでの表現としては、「がんばる」という発言が「勇気を表現すること」に近接しているものとして認識できるが、「がんばる」という表現にも心理的側面と社会的側面があり、自らに語る「がんばる」と他者に語る「がんばる」が存在する。

自らに語る「がんばる」は意思の確認であり、自己選択、自己決定の再確認としての言動として捉えた。インタビューでは「がんばった」という過去形での表現となったが、自ら選択したスポーツや参加した大会で、不安や動揺との葛藤経験を乗り越えた経験が、いわば「勇気を表現」したことであり、「がんばった」という表現につながっていた。この「がんばった」結果として、大会やトレーニングが「ほとんどの場合」肯定的な思い出になっている。ここで「ほとんどの場合」とした理由は、「がんばった」結果の失敗経験が明確に聴き取れなかったことによるものである。サンプルの限界とも関連するが、調査対象内のインシデントで否定的な思い出は、スポーツプログラムへの参加の選択時の混乱によるもので、同時期に異なるプログラムが展開されている場合、アスリートは参加するスポーツを選択しなければならず、そのことが「いやだった」経験となり、がんばりたくてもできなかったような体験となる。

アスリートにとってスペシャルオリンピックスは【自己表現の手段】であるため、スポーツを選択することも[自己表現の心理的側面]である。もちろん、[コーチからのサポートイブなかかわり]は、どのプログラムに参加しても経験が可能であるが、当該スポーツが肯定的な【自己表現の手段】とならないケースでは長期の参加が期待できない可能性も否めない。スペシャルオリンピックスが【自己表現の手段】であるならば、否定的な自己表現も可能であり、プログラムでの不適応な行動等を否定することはできない。そのためコーチには、否定的な自己表現を作り出している要因を探り、問題解決の方策を講ずることが要求される。また、「がんばる」が自己表現であるなら、無理にがんばらせるのは、自己表現の強制につながり、それは本調査で明らかになった【自己表現の手段】モデルから外れることになる。

【自己表現の手段】の[心理的側面]に関連して、メダルについて記しておく。アスリートがメダルを大事にしていることはほとんどの地区組織で認識されている事象であろう。表彰は、アスリートにとって「がんばった」自己表現が確認できる手段である。すなわち、【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピックス】で得たメダルは、即時的な確認の手段であり、長期的な確認の手段となっている。スペシャルオリンピックスが表彰を重要視することは周知のとおりであるが、本調査においてその意義が再確認できたといえよう。メダルを大事にすることは、メダルを授与されるに至ったさまざまな【自己表現の手段】を

大事にしていることでもあり、アスリートにとっての【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピックス】の存在意義を確認することができる調査結果である。

③ [社会的側面]

[心理的側面]で記述したことと重複するが、[自己表現の心理的側面]と[自己表現の社会的側面]を明確に区別することは困難であり、多くのインシデントが両面に関わっていた。[社会的側面]においては、表現が他者へ向かうパターンについて論ずる。

【自己表現の手段】を構成する[社会的側面]は、他者からのほたらきかけへの応答であり、即時的な応答から長期的な応答の幅がある。即自的な応答は、トレーニングや大会の際に観客から応援されることで、「がんばれる」「はりきる」ことにつながる。また、アスリートにとって他のアスリートやコーチと同じ活動に参加していることは単純に「楽しい」ことで、「スペシャルに行く笑顔になれる」といった発言は「場の共有」を経験した結果であるといえる。プログラムや大会、イベントを支えるボランティアや他地区（世界大会では他国）のアスリートとの交流もこのカテゴリーに入り、日常生活とは違った人たちとの交流、言語によるコミュニケーションにとどまらないハイタッチやピンバッチの交換なども[自己表現の社会的側面]である。

また合宿や大会などの家族や日常生活から離れるイベントは、アスリートにとって日常のコミュニケーションを超えるコミュニケーションが要求されるイベントであり、この課題の克服は[自己表現の社会的側面]に含まれる。言語、非言語による自己表現の方法を駆使せざるを得ないイベントであるが、他者への働きかけはこのイベントの遂行には不可欠である。日常のコミュニケーションを超えることは、その表現が流暢になされないケースも想定され、時にそれがパニックとして現れることもあるが、イベントを乗り越えることは課題を克服した証でもある。

たとえ自己表現が流暢になされなかったとしても、[自己表現の社会的側面]が受容される環境はアスリートにとって居場所になり、自分がそこに「居ていい感覚」をスペシャルオリンピックスは提供している。すわわち、アスリートにとってスペシャルオリンピックスは自らの存在場所を確認する手段なのである。存在場所での存在の確認は他者からの承認によって強化され、確からしさが高まるが、表彰はその代表的な事象である。スペシャルオリンピックスでは表彰式、また表彰式後にアスリートがコーチと抱き合っって涙を流すシーンが見受けられるが、このようなインシデントも[自己表現の社会的側面]であり、他者からのほたらきかけの結果としての自己表現と、その表現が肯定的に受容された結果をコーチと共有し、感情が高まるものであると捉えられた。

さらに、この[自己表現の社会的側面]は単なる他者からのほたらきかけへの即時的応答にとどまらず、「がんばっているとみんなが喜ぶから」といった内発的な動機も含むものであった。特に本調査では、がんばるという[自己表現]が「家族への感謝」の表現を

含んでいるものとして捉えた。コミュニケーションは双方向の行為によって成立するが、家族から発せられるメッセージをアスリートがトレーニングや大会といったスペシャルオリンピックスの活動でがんばることで応え、それは自らの競技での成功だけにとどまらず、家族を喜ばせたいという動機によるものを含んでいるものであった。これは長期にわたってプログラムへ参加することの動機に関与しており、長期の参加が国内外での大会参加につながり、それは家族にとっても喜びにつながっていることをアスリートは認識している。アスリートの家族が「この子のおかげで（国内外の開催場所）にも行けた」と誇らしく語ることは、アスリートの感謝の表現が家族に伝わった確認になり、アスリートの自尊心を高めることにつながる。

(3) 【自己表現の手段】の帰結

アスリートがスペシャルオリンピックスを【自己表現の手段】として用いた帰結として、[可能性の拡大]と[社会への関心の拡大]を見込むことができる。[可能性の拡大]と[社会への関心の拡大]は、【自己表現の手段】の帰結における二つのステージとしてとらえた。

① [可能性の拡大]

[可能性の拡大]はアスリートを中心とした[身体的可能性の拡大][心理的可能性の拡大][社会的可能性の拡大]の三側面から構成され、これらは【自己表現の手段】の三側面に対応している。[身体的可能性の拡大]はスポーツ技術の向上、すなわち「うまくなる」「はやくなる」等に代表されるものであり、「体力の向上」もこのカテゴリーに含まれる。[心理的可能性の拡大]は自らの自信の拡大であり、[身体的可能性の拡大]と強く関連している。まず、スポーツにおける「最初はできなかったけどできるようになっていく」ことが拡大することで、スポーツに対する自信が拡大する。そしてこの自信が「スペシャルでがんばるから仕事もがんばれるようになった」というような「がんばることができる自分の自信」へと、生活全般における自信へと波及拡大している。

さらに、他のアスリート、コーチやボランティアとの交流は、アスリートの日常生活を拡大するものであり、[社会的可能性の拡大]につながっている。アスリートにとって合宿や大会は、家族や日常生活の場から地理的にも離れた旅行であり、社会性が求められる経験でもある。プログラムから合宿へ、そして大会へ拡大するスペシャルオリンピックスの活動が、アスリートの[社会的可能性の拡大]と正の相関の関係にあることが再確認された。

② [社会への関心の拡大]

[社会への関心の拡大]は文字通り、【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピック】がアスリートの関心をアスリートの外側の社会へ拡大させていくことである。インタビューにおいて複数のアスリートからスペシャルオリンピックスを「もっと知って欲しい」という発言があった。「まだスペシャルを知らない人に知って欲しい」という発言は「もっと仲間になってほしい」という発言等と相まって、アスリートがスペシャルオリンピックスの活動の拡大を希望していることが明確になった。本人たちの意識が自分自身から外側に向かっていることである。

本調査ではその方法までを言及することができないが、本調査へのインフォームド・コンセントにおいても、調査結果が広報活動へつながることを期待して調査への参加を同意しており、他の知的障がいのある人たちへスペシャルオリンピックスのことを伝えたいという動機が存在している。すでに ALPs やアスリート・メッセンジャーなどの活動を通じて、アスリート自身によるスペシャルオリンピックスの広報活動を展開しているが、インタビューにおいては、その展開方法にこだわりはないようであった。

さらに一事例のみのエピソードにとどまるが、【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピックス】を東日本大震災の被災者に伝えたいという希望があった。これは自分たちががんばって（自己表現して）得た力は、被災者を勇気づけるのではないかという本人の仮説に基づくものである。障がいや生活上の障壁は異なるものの、「生活のしづらさ」を感じていることに関しては同質であり、「がんばりを届けて欲しい」というアスリートのメッセージも、アスリートの関心が社会に向けられていることであると捉えられる。

(4) スペシャルオリンピックスはなぜ【自己表現の手段】なのか

本調査で明らかになったコンセプト、カテゴリーの中心は【自己表現の手段】であったが、スペシャルオリンピックスが【自己表現の手段】である理由は次の三点に集約できるが、これらの理由は、スペシャルオリンピックスのコーチクリニックや説明会で語られる事柄と一致していた。第一にスペシャルオリンピックスは、その活動に参加することで自立と社会参加を目的とする実体であり、目的概念ではない。第二に、手段は、知る段階から、理解し使いこなす段階を想定することができ、スペシャルオリンピックスを知っているだけでは【自己表現の手段】にはならないが、参加が継続することで手段としての意義が深化するためである。第三に、手段をマスターして用いることによって、結果として得られる効果が期待できることによる。アスリートがスペシャルオリンピックスの活動に継続的に参加することで得られる効果が本調査で明らかになったが、それは【自己表現の手段】を用いた結果の効果である。

アスリートにとってコミュニケーションの課題は重大な懸念事項の一つであり、スペシャルオリンピックスを【自己表現の手段】の手段として用いることで、その課題を克服

するという目的の達成にアプローチすることができる。そのアプローチがアスリートにとって肯定的な体験であるならば、その手段の活用が推奨されて然るべきであろう。

5. 調査の限界

本調査におけるインタビューの対象は5地区からの10名である。また、アスリートに影響を及ぼすのはスペシャルオリンピックスの活動にとどまらない。この点において、家族や地域、就労や他の文化的活動等からの継続的な影響は統制されていない。また、本調査は理論構築を目的としたレベルまでの研究を想定していないため、浮上した中核カテゴリーをめぐる文献検討は実施していない。

6. 終わりに

20年間の活動の総括として各地域のアスリートにインタビューできたことは貴重な体験となった。これまでコーチやトレーナー等の立場で「スペシャルオリンピックスの効果」を伝えてきたが、本調査では、それをアスリート本人の立場で再検証する機会となった。アスリートに対する効果を多面的に検証する試みは、アスリート中心に展開されるべきものである。次にこのような調査の企画が上がった際には、アスリート本人の調査への参画が期待される時代になるだろう。本調査ではそこまで先進的に進めることができなかったが、アスリート本人の意思による調査への参加を試み、その成果を文字化することができたことは大きな収穫となった。

障害者権利条約の批准に伴う各種の法制度が整備されてきたにも関わらず、わが国においては当事者不在の議論、パターナリスティックな援助が展開され続けている。スペシャルオリンピックスは当初からワールド・スタンダードな活動であり、知的障がいのある人たちへのスポーツの提供といった実態的な側面にとどまらず、社会資源の活用、地域のエンパワメントなど、スポーツだけにとどまらない、社会福祉や教育、地域づくりなど、多方面でのフロントランナーであった。本調査の結果は、アスリートの視座からこれらの先進性を検証できたのではないかと考えている。本調査の結果を今後の活動の基盤としつつ、ゼネラルオリエンテーション等で伝えられるスペシャルオリンピックスのミッションや独自性等を再確認し、インクルーシブな社会を構築していくためのフロントランナーであり続ける努力を継続しなければならない。

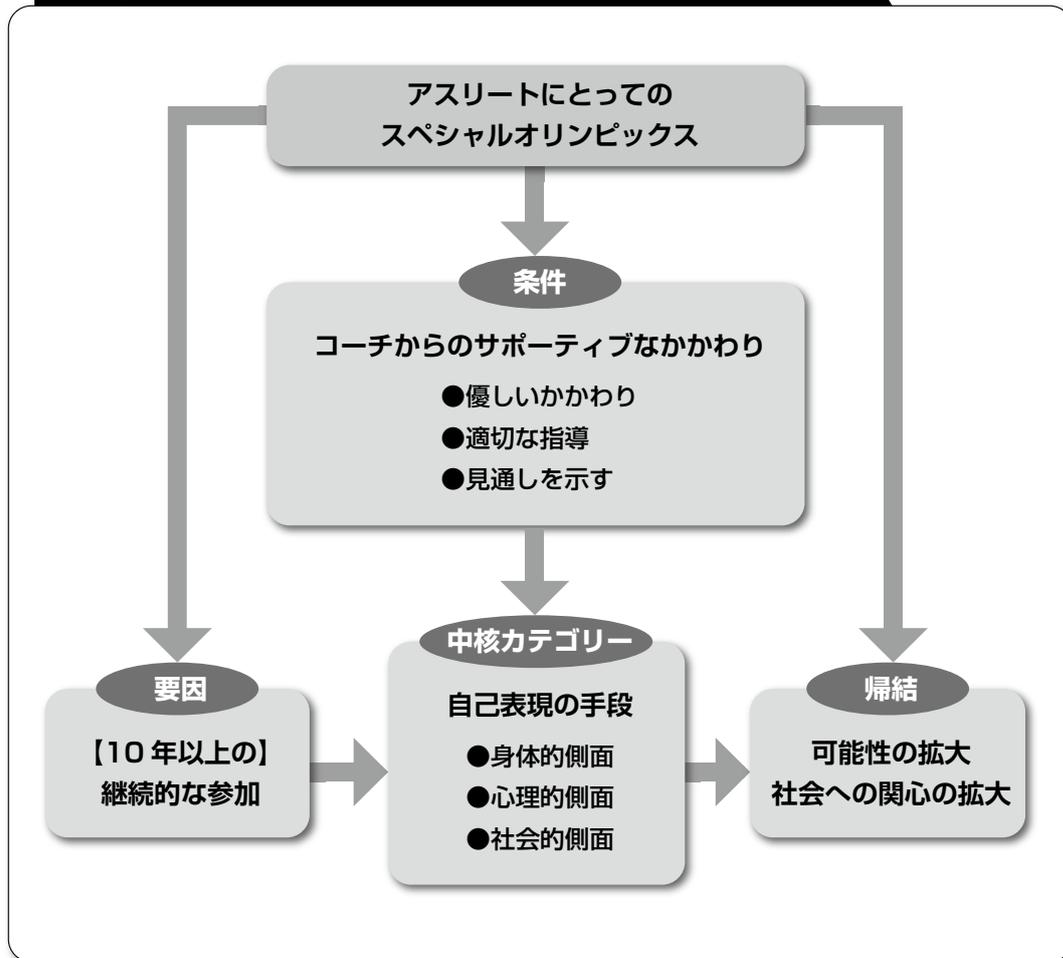
本調査はスペシャルオリンピックス日本の多くの関係者の尽力によってなし得た。調査の実施にあたって協力してくださった各地区組織の関係者、ご家族、そしてアスリート諸氏にお礼を申し上げる次第である。

参考文献

Glaser, B. (1978). *Theoretical sensitivity*. Mill Valley, CA: Sociology Press.

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本監修. (2013). 『ゼネラルオリエンテーション標準テキスト』. 公益財団法人スペシャルオリンピックス日本.

図●【自己表現の手段としてのスペシャルオリンピックス】



3

スペシャルオリンピックス参加の効果 スペシャルオリンピックス活動の効果・影響

研究グループ（事務局長以下50音順、下線は本調査の担当者）

渡邊浩美（事務局長）、岩沼聡一郎、志村健一、田引俊和、仲野隆士、松本耕二

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重し合い共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 研究目的

本研究は、スペシャルオリンピックスの使命、目的、理念等で述べているスペシャルオリンピックスに参加することで得られる効果を検証することを目的とする。

具体的には、①スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果・影響（以下、本研究におけるアスリートとは、スペシャルオリンピックスに参加している知的障がいのある人をさす）、②SO活動にボランティアとして参加しているコーチやスタッフの、SO活動に関する意識の特徴を明らかにすることを目指す。

3. スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果に関する会員調査

（1）調査方法

本研究では、スペシャルオリンピックス活動がアスリートにとってどのような効果、影響があるのか、実際に活動に関わっているコーチやコーチ以外の一般ボランティア、ファミリー、理事役員等を対象にアンケート調査を行なった。

具体的には、2013年から2014年にかけてSO日本の地区組織を通じて直接、または郵送により調査票を配布した。調査の実施に際して、全て無記名調査票を用いた他、結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計的に処理を行い個人が特定されない旨を調査票に記した。また事前に関係者に調査票の内容を示し確認と同意を得た上で配布した。複数の地区組織で同じ調査票を用い、最終的に約1200件の回答を得た。

なお、本来ならアスリート本人に直接その意識等を確認すべきではあるが、調査用紙を用いた形では得られる回答に妥当性を欠く可能性がある。そのため本研究では、アスリート本人ではなく、ボランティアやファミリーを対象として、「回答者が考える、スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果・影響」について調査、分析を試みた。

(2) 調査項目と分析方法

質問項目は大きく2群で構成した。一つは「スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果・影響」に関する質問22項目で、先行研究等を参考にスポーツ場面に加え生活場面をも意識した質問群を設定した。もう一群では、「スペシャルオリンピックス活動が回答者本人に及ぼす効果・影響」など25の質問項目を設定した。それぞれ「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階尺度で得点を与え、因子分析により分析を行った。

(3) 調査結果①「回答者の属性」

回答者1196人の基本的属性を以下に示す。スペシャルオリンピックス地区組織での役割、立場については、理事役員等が25名(2.1%)、ファミリーでもあり理事役員等が65名(5.4%)、コーチボランティア176名(14.7%)、ファミリーでもありコーチが116名(9.7%)、コーチ以外のボランティア84名(7.0%)、ファミリーでもありコーチ以外のボランティアが81名(6.8%)、とくに役割などがないファミリーが515名(43.1%)、その他50名(4.2%)であった(表1)。「コーチボランティア」、「ファミリーでもありコーチ」「とくに役割などがないファミリー」の3者で全体の7割近くとなっている。その他、回答者の属性を表1に示す。

表1●回答者の基本属性 (n=1196、欠損値があるため合計が異なる)

項目	カテゴリー	人数	%
SOでの 役割・立場	理事・役員等	25	2.1
	ファミリーでもあり理事・役員等	65	5.4
	コーチボランティア	176	14.7
	ファミリーでもありコーチ	116	9.7
	コーチ以外のボランティア	84	7.0
	ファミリーでもありコーチ以外のボランティア	81	6.8
	とくに役割などがないファミリー	515	43.1
	その他	50	4.2
	欠損値	84	7.0
SO活動の 頻度	ほとんど参加していない(賛助・寄付等のため)	217	18.1
	年に数回程度	192	16.1
	月に1~2回	503	42.1
	週に1回程度	206	17.2
	週に2~3回	40	3.3
	週に4日以上	6	0.5
	欠損値	32	2.7
SOでの 活動期間	1年未満	89	7.4
	1年~5年	429	35.9
	5年~9年	314	26.3
	9年以上	326	27.3
	欠損値	38	3.2
回答者の 年齢層	10代-20代	93	7.7
	30代-50代	764	63.9
	60代以上	317	26.5
	欠損値	22	1.8

(4) 調査結果②「スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果」

スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果、影響について、22の質問項目の因子分析（固有値1基準、主因子法、バリマックス回転）により、「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」という3つの因子を抽出した（表2）。

信頼性 α 係数は、第1因子.92、第2因子.89、第3因子.87であった。因子間相関は、それぞれ有意に高かった。

表2 ● SO活動がアスリートに及ぼす効果・影響

因子と質問項目		I	II	III
社会的効果	(スポーツ以外の) 日常生活上の動作が高まった	.739	.253	.290
	(スポーツ以外の) 日常生活上の質が高まった	.721	.299	.252
	仕事・学校などに前向きに取り組めるようになった	.714	.319	.191
	衝動性、攻撃性などが低減された	.672	.185	.179
	食生活を意識するようになった	.662	.152	.195
	集団行動、チームワークなどできるようになった	.659	.379	.243
	まわりの人とのコミュニケーション力が向上した	.610	.391	.201
	SO以外でもスポーツへの関心が高まった	.564	.230	.287
	自分のそれまでのスポーツ経験が活かしている	.554	.213	.216
地域社会とのつながりが増えた	.493	.291	.257	
心的・精神的効果	SO活動のある日を楽しみにしている	.184	.725	.278
	多くの仲間ができてうれしい	.328	.645	.166
	SO活動がある生活に満足している	.266	.596	.382
	自分への自信が高まった	.378	.568	.397
	大会や競技会参加などがんばる目標ができた	.352	.522	.229
	こころの健康に役立っている	.365	.506	.455
	家族の絆、家族関係がよくなることに役立っている	.422	.469	.286
自分の健康状態には満足している	.316	.343	.316	
身体的効果	身体的な健康に役立っている	.276	.288	.809
	体力面の向上につながっている	.275	.300	.721
	運動の機会としてちょうどいい	.237	.255	.714
	スポーツの技術面が向上した	.417	.297	.522
α 係数		.92	.89	.87
下位尺度間相関、平均±SD		I 3.28±0.69	-	.75**
		II 3.87±0.68	-	.72**
		III 3.92±0.75	-	-

**P<.01

(5) 調査結果③「スペシャルオリンピックス活動が回答者本人に及ぼす効果」

スペシャルオリンピックス活動がアスリートに及ぼす効果、影響について、25の質問項目の因子分析（固有値1基準、主因子法、バリマックス回転）により、「スペシャルオリンピックス活動への共感」「身体面への影響」「社会生活への影響」「心的・精神面への影響」という4つの因子を抽出した(表3)。信頼性 α 係数は、第1因子.88、第2因子.90、第3因子.84、第4因子.83で、有意な因子間相関を確認した。

表3●SO活動が回答者本人に及ぼす効果

因子と質問項目		I	II	III	IV
スペシャル オリンピックス 活動への共感	SO活動がある生活に満足している	.784	.226	.200	.045
	SO活動のある日を楽しみにしている	.705	.375	.169	.151
	自分自身の心的な成長に役立っている	.630	.243	.297	.366
	多くの仲間ができてうれしい	.619	.254	.188	.348
	SO活動の理念・方針には共感している	.582	.039	.139	.222
	SO活動がうまくいくように自分なりにがんばっているつもりだ	.529	.258	.124	.203
	こころの健康に役立っている	.475	.260	.338	.440
	自分の健康状態には満足している	.405	.249	.247	.168
	SO活動に係る費用負担などはあまり気にならない	.355	.001	.142	.122
身体面への影響	体力面の向上につながっている	.294	.717	.339	.160
	スポーツの技術面が向上した	.064	.695	.201	.281
	運動の機会としてちょうどいい	.349	.678	.169	.113
	身体的な健康に役立っている	.293	.636	.283	.319
	食生活を意識するようになった	.047	.518	.417	.257
	自分への自信が高まった	.403	.450	.429	.298
	(スポーツ以外の)日常生活上の動作が高まった	.320	.411	.692	.153
社会生活への 影響	(スポーツ以外の)日常生活上の質が高まった	.415	.339	.661	.191
	仕事・学校などに前向きに取り組めるようになった	.374	.297	.552	.348
	SO以外でもスポーツへの関心が高まった	.207	.342	.500	.382
	家族の絆、家族関係がよくなることに役立っている	.386	.273	.475	.161
心的・精神面 への影響	自分のこれまでのスポーツ経験が活かしている	.170	.373	.084	.607
	地域社会に対する意識が高まった	.296	.164	.380	.604
	スポーツの指導法についてもっと勉強したいと思う	.223	.372	.096	.575
	障害がある人たちに対する意識が高まった	.358	.103	.256	.542
	他の人のことを理解しあえるようになった	.437	.151	.414	.474
α 係数		.88	.90	.84	.83
下位尺度間相関、平均±SD		-	.68**	.73**	.70**
I 3.65±0.66			-	.80**	.67**
II 3.06±0.81					.70**
III 3.14±0.80					
IV 3.36±0.81					

**P < .01

4. 考察

(1) スペシャルオリンピックス活動の効果・影響

本研究では、スペシャルオリンピックス活動の効果・影響について、SO関係者はどのような意識を持っているのか検討を行った。複数の地区組織から得た約1200件の回答の22の質問項目を分析した結果、アスリートに対する効果・影響として「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」の3つの因子を確認することができた。

これらはスペシャルオリンピックスの基本理念としてゼネラルオリエンテーション標準テキストの冒頭にも掲げられている「スペシャルオリンピックスは、スポーツのトレーニングと競技に参加することが、知的障害のある人々にとって身体的、知的、社会的、そして精神的に効果があると信じています。」と合致するものである。参加者がスペシャルオリンピックスの基本理念を意識している、あるいは共有しているという結果が得られたことは非常に意義あるものといえる。

また、コーチやコーチ以外のボランティア、ファミリーについても、関連する25の質問項目から「身体」「社会生活」「心的・精神面」という因子が確認できアスリート同様にSO活動の基本理念の具現化につながっていると考えられる。加えて、回答者自身への効果・影響として「スペシャルオリンピックス活動への共感」因子も得られた。これはアスリートやファミリーに加え、コーチなどのボランティア活動への参加動機にも関係していると推察する。ここで得られた結果を大切にして、かつ、関係者で共有、発信しながら今後の活動推進、およびアスリートや新規ボランティアの確保、既存活動者の継続性などに貢献していくことを期待する。

(2) まとめと今後の課題

本稿では、スペシャルオリンピックス活動がアスリートやボランティア等に及ぼす効果・影響について検討を行ってきた。その結果、「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」という活動の基本理念と同様の3つの因子を確認した。そのうえで、ここでの結果を一般化する限界と今後の課題に触れる。

まず、アスリートへの効果・影響については本人ではなく回答者の意向が反映されている。アスリート本人への調査であれば精度は高まると考える。

また、活動の効果として「社会的効果」「心的・精神的効果」「身体的効果」という3つの因子が確認できたが、それぞれどれぐらいの効果があったのか具体的な測定、分析を行っていない。今後はこれらを意識して継続調査を行なう必要がある。

参考文献

公益財団法人スペシャルオリンピックス日本監修 (2014) 『ゼネラルオリエンテーション標準テキスト』 公益財団法人スペシャルオリンピックス日本。

4

スペシャルオリンピックス参加の効果 スペシャルオリンピックス参加者の知的障害者に対する意識

研究グループ（事務局長以下50音順、下線は本調査の担当者）

渡邊浩美（事務局長）、岩沼聡一郎、志村健一、田引俊和、仲野隆士、松本耕二

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重し合い共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 研究目的

本研究は、スペシャルオリンピックスの使命、目的、理念等で述べているスペシャルオリンピックスに参加することで得られる効果を検証することを目的とする。

具体的には、スペシャルオリンピックスのコーチクリニック等で用いられるゼネラルオリエンテーション標準テキストに示されている「地域社会も参加、見学により、知的障害のある人々を理解し、尊敬し、受け入れるという効果がある」に関して、活動参加者の意識の特徴の把握を試みる。

3. スペシャルオリンピックス参加者の知的障害者に対する意識調査

(1) 調査方法

本研究では、スペシャルオリンピックスの参加者が持つ、知的障害のある人々に対する意識の特徴について、実際に活動に関わっているコーチ等を中心にアンケート調査を行った。

具体的には、2006年の夏季ナショナルゲームにおいて全国からアスリートを大会に引率した各都道府県選手団のコーチボランティアと、開催地において大会の運営全体を支援した現地の大会ボランティアを対象とした。コーチボランティアについては全数である560人に、また、大会ボランティアについてはほぼ全数にあたる1000人に同じ内容の無記名調査票を、大会期間中に大会実行委員会を通じて配付し、郵送法により回収した。回収期間は、大会終了直後から1か月程度で、最終的に得られた回答は373人（回収率23.9%）であった。調査票配布にあたっては、全て無記名調査票を用いた他、結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計的に処理を行い個人が特定されない旨を調査表に記した。また事前に大会実行委員会に調査票内容を示し確認と同意を得た上で調査票を配付した。

(2) 調査項目と分析方法

本研究では、これまでの先行研究を参考に、知的障害者へのイメージに関する形容詞対質問項目 20 件と日常生活上の場面を想定した意識に関する質問項目 18 件を作成した。「非常にそう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「まあそう思う」「非常にそう思う」の 5 段階尺度による SD 法を用いて得点化した。回答の偏りへの影響を避けるため、形容詞対質問項目のいくつかにおいて、評価の方向を左右入れ替えて配置した。また、本研究においてはこれらの質問項目を「知的障害者に対するイメージ」として分析に用いた。

併せて、知的障害者に対する日常生活場面における意識に関する質問項目については、18 項目を作成した。前述の知的障害者へのイメージと同様に、これらの質問項目を本研究では「知的障害者に対する日常生活場面における意識」として分析に用いた。それぞれ「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの 5 段階尺度で得点を与え、因子分析により分析を行った。その上で、抽出された各因子とボランティア活動期間との関係性について多重比較を行い、さらにボランティア活動以外での障害者との接触経験の影響を確認するために職業項目を加えて多変量分散分析を行なった。

(3) 調査結果①「回答者の属性」

回答者（コーチボランティア、大会ボランティア）373 人の基本的属性を以下に示す。

表1●回答者(コーチ、大会ボランティア)の基本属性(n=373、欠損値があるため合計が異なる)

項目	カテゴリー	度数	%
性別と年齢	男性 (平均46.5±12.52歳)	197人	52.8%
	女性 (平均41.3±14.49歳)	139	37.3
	欠損値	37	
SOでの活動期間	SO経験なし	93	24.9
	0.1～1年	35	9.4
	1～4年	139	37.3
	4年以上	106	28.4
	欠損値	0	
職業	会社員	134	35.9
	団体職員	18	4.8
	公務員	32	8.6
	自営業	28	7.5
	主婦	19	5.1
	学生	26	7.0
	パート・アルバイト	25	6.7
	無職	30	8.0
	その他	25	6.7
	欠損値	36	

男性は197人(52.8%)、女性が139人(37.3%)であった。また、スペシャルオリンピックスでの活動経験については、経験なしが93人(24.9%)、活動初期にあたる0.1～1年が35人(9.4%)、活動中期にあたる1～4年が139人(37.3%)、活動長期となる4年以上が106人(28.4%)であった。(表1)

(4) 調査結果②「SO参加者の知的障害者に対するイメージ」

スペシャルオリンピックスに参加するコーチボランティア、および大会ボランティアが持つ知的障害者に対するイメージについて、20の質問項目の因子分析(固有値1基準、主因子法、プロマックス回転)を行った。その際、十分な因子負荷量を示さなかった5項目を除外し再度主因子法(プロマックス回転)により因子解を求めた。なお、評価の方向を左右入れ替えた質問項目については得点を逆転させて修正した。

その結果、「活動」「親和」「情動」「統制」という4つの因子を確認した。信頼性 α 係数は、第1因子が.76、第2因子が.71、第3因子が.54、第4因子が.52であり、回転前の4因子で15項目の全分散を説明する割合は55.68%であった(表2)。

表2 ●知的障害者に対するイメージ

形容詞対質問項目		I	II	III	IV
因子I:「活動」	活発な — 不活発な	.809	-.117	-.083	.066
	陽気な — 陰気な	.629	.135	-.016	.029
	積極的な — 消極的な	.498	-.115	-.086	-.053
	幸せな — 不幸な	.461	.161	.241	-.196
	社交的な — 非社交的な	.418	-.095	.277	.070
	明るい — 暗い	.409	.383	-.119	.080
	身近な — 縁遠い	.371	.018	.257	-.014
因子II:「親和」	やさしい — こわい	-.079	.847	.021	.023
	おだやかな — 攻撃的な	-.094	.802	.098	-.103
	純粋な — 不純な	.014	.383	-.116	.336
因子III:「情動」	安全な — 危険な	-.102	.127	.722	.068
	我慢強い — あきっぽい	-.012	-.100	.434	.263
因子IV:「統制」	勤勉な — 怠惰な	.006	.161	.000	.558
	敏感な — 鈍感な	.083	-.115	.123	.497
	注意深い — 軽率な	-.130	-.038	.234	.441
α 係数		.76	.71	.54	.52
下位尺度間相関、平均±SD		—	.46**	.30**	.34**
I 3.53±0.50		—	—	.27**	.36**
II 4.06±0.61		—	—	—	.33**
III 3.12±0.67		—	—	—	—
IV 3.53±0.59		—	—	—	—

** P < .01

(5)調査結果②「SO参加者の知的障害者に対する日常生活場面における意識」

スペシャルオリンピックスに参加するコーチボランティア、および大会ボランティアの、知的障害者に対する日常生活場面における意識の因子分析（固有値1基準、主因子法、プロマックス回転）では、18の質問項目から3因子を抽出した。その際、十分な因子負荷量を示さなかった3項目を除外した（表3）。

抽出した3因子は、「社会的受容」、「実践態度」「肯定的立場」で、各因子の信頼性 α 係数は、第1因子が.87、第2因子が.78、第3因子が.60であり、回転前の3因子で15項目の全分散を説明する割合は55.82%であった（表3）。

表3 ●知的障害者に対する日常生活場面における意識

質問項目		I	II	III
因子Ⅰ： 「社会的受容」	家の近くに、知的障害者の施設や養護学校ができることはかまわない	.816	-.007	-.080
	知的障害者は、教育や指導によって日常生活習慣を身につけることができる	.813	-.156	-.076
	自分の子どもや兄弟が、将来、知的障害者の教育や福祉の仕事に就くことに賛成である	.712	.003	.000
	知的障害者は、できるだけ社会で一般の人と一緒に生活する方がよい	.660	-.004	.046
	知的障害のある人と一緒に仕事をしてもよい	.583	.203	.065
	普通の生活でもっと知的障害のある人と関わる機会があってもよい	.448	.338	.050
因子Ⅱ： 「実践態度」	知的障害のある人たちのためのボランティア活動に参加したい	-.178	.903	.004
	知的障害のある人たちの施設や養護学校を訪問してみたい	-.009	.888	-.250
	知的障害のある人が困っていたら助けてあげたい	.137	.453	.142
	知的障害のある人と一緒にスポーツ活動をしてもよい	.154	.447	.154
	知的障害者についての新聞、雑誌、テレビ等の記事や放送に関心を持って見ている	.103	.377	.138
因子Ⅲ： 「肯定的立場」 ※質問文に対して逆の意識（負の値）となっている	知的障害のある人は施設で生活するほうがよい	-.094	.055	-.589
	知的障害のある人のことは親が責任をもてばよい	-.010	.059	-.571
	多くの知的障害者は暴れたり物をこわしたりする乱暴な行動をする	.141	-.123	-.545
	知的障害者のための福祉は、もっと生活にゆとりができてから考えるべきである	.036	.120	-.470
α 係数		.87	.78	.60
下位尺度間相関、平均±SD				
I 4.36±0.53		—	.64**	.46**
II 4.31±0.52		—	—	.37**
III 2.04±0.64				—

** P < .01

(6) 調査結果③「SOボランティア経験と知的障害者に対する意識の関係」

続いて、抽出された知的障害者に対するイメージ因子4つ、および知的障害者に対する日常生活場面における意識に関する因子3つと、SOでのボランティア活動経験の関係についての検討を行った。

具体的には、各因子群の平均値を下位尺度得点として算出したものと、SOでのボランティア参加経験年数を分析対象とした。SOボランティア活動経験については、①活動初期（0.1～1年）、②活動中期（1～4年）の群、③活動長期（4年以上）の群を設け、さらに④これまで全くSO組織でのボランティア活動の経験がない群の4区分を設定し、一元配置分散分析および有意確立5%水準のTukey HSD法による多重比較を行った。

一元配置分散分析の結果、知的障害者に対するイメージ因子ではボランティア活動期間による有意差はなかった。一方、知的障害者に対する日常生活場面における意識に関する因子では、「社会的受容」(F(3.313)=3.89, $p < .01$), 「実践態度」(F(3.302)=3.52, $p < .05$), 「肯定的立場」(F(3.307)=3.06, $p < .05$) で有意であった。多重比較では「社会的受容」因子について、SO組織でのボランティア活動の経験がない群と活動中期、および長期の群との間で有意差があった。「実践態度」因子では、ボランティア経験がない群と活動初期の群間に有意差がみられた。これとは逆に「肯定的立場」因子では、活動経験がない群が活動長期の群よりも負の負荷量が有意に高くなっていた(図1、2、3)。

図1 ●社会的受容因子とボランティア経験の多重比較

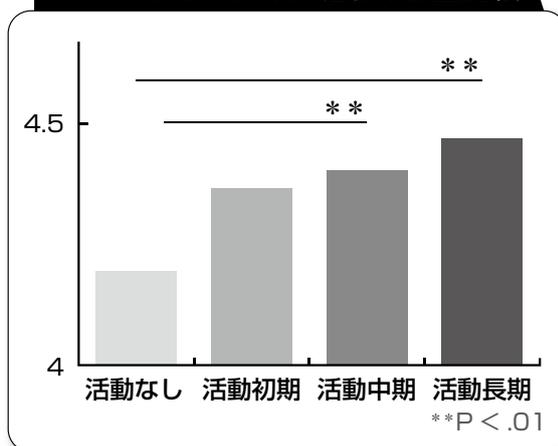


図2 ●実践態度因子とボランティア経験の多重比較

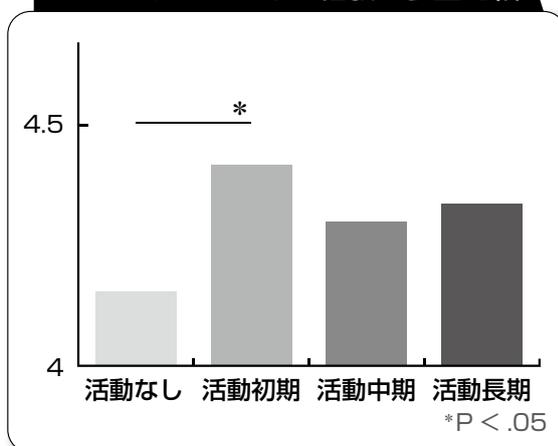
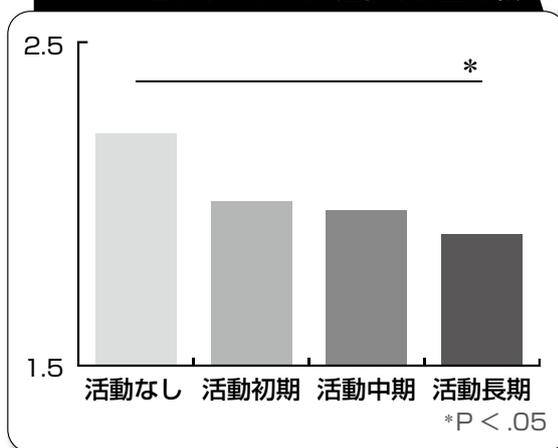


図3 ●肯定的立場因子(負の負荷量)とボランティア経験の多重比較



(7) 調査結果④「SOボランティアの職業と知的障害者に対する意識の関係」

ボランティア活動とは別に日常的な障害者との接触の機会の影響を確認するために、ボランティア活動経験の他に職業項目を加えて多変量分散分析を行なった。その結果、今回抽出された全ての因子において有意差はなかった。

4. 考察

(1) SO参加者の知的障害者に対する意識分析

本研究では、スペシャルオリンピックスのボランティア参加者の知的障害者に対する意識の特徴を把握するために20の形容詞対質問項目を分析した。その結果、「活動」「親和」「情動」「統制」という4つのイメージ因子を抽出した。第1因子は「活動」因子であるがこれは本調査を全国的な大会（ナショナルゲーム）という場で行なったことが影響していると考えられる。また、知的障害者に対するイメージの4因子ともボランティア活動期間との間に有意差はなかった。これについてはこの大会（ナショナルゲーム）に参加しているアスリートに対する率直な印象に大きな差がなかったことによるものと推察される。

続いて、知的障害者に対する日常生活場面における意識について、因子分析の結果「社会的受容」「実践態度」「肯定的立場」という3つの因子が抽出された。この因子とボランティア活動の期間との関係を検討した結果、3因子とも有意な関係がみられた。活動長期の群の方が知的障害者に対しておおむねポジティブな意識であることが窺え、SOでのボランティア経験と知的障害者に対するポジティブな意識形成には関連性があることが確認できた。とくに、スペシャルオリンピックスのゼネラルオリエンテーション標準テキストの基本理念では「地域社会も参加、見学により、知的障害のある人々を理解し、尊敬し、受け入れるという効果があるとも信じています。」と掲げられており、今回の調査結果はこれを一つの形として示したといえる。

(2) 研究の限界と今後の課題

本研究での結果を一般化する上での限界と今後の課題に触れる。まず、回答者の多くは事前にコーチクリニックと称する研修を受けており、この研修では知的障害のあるアスリートとボランティアは対等であることが説明されている。このことが、SO組織でのボランティア活動の経験がない群とある群との意識の差に影響を与えた可能性がある。

また、障害者への意識や態度を規定する要因は接触経験だけではなく身近な障害者の存在や、これまでの教育環境、生活環境等の影響もあると考えられる。今後は、これらの要因、及び適切な尺度を用いて研究を進めていく必要がある。

5

スペシャルオリンピックス参加の効果 SO活動の休止、離脱に関する調査研究

研究グループ（事務局長以下50音順、下線は本調査の担当者）

渡邊浩美（事務局長）、岩沼聡一郎、志村健一、田引俊和、仲野隆士、松本耕二

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重し合い共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 研究目的

前述のとおり、スペシャルオリンピックス活動は知的障害があるアスリートに加え、ボランティア等にも一定の成果があることが確認できた。今後、より意義あるものにしていくためにも活動を継続していくことが求められるが、本研究ではとくに、活動を継続、あるいは推進していくための根拠の一つともなるSO活動に関する課題等の分析を試みる。具体的には、スペシャルオリンピックス関係者の活動休止、および離脱の要因等に関する調査分析を行う。

3. スペシャルオリンピックス活動の休止、離脱に関する調査研究

(1) 調査方法

本研究では、スペシャルオリンピックス活動の休止、あるいは離脱の要因等を検討する基礎資料を得るために調査票を用いた量的な調査を行なった。なお、本来ならアスリートも対象として、休止、あるいは離脱理由、課題等を把握すべきではあるが、質問紙を用いた形式では調査結果に妥当性を欠く可能性がある。そのため本研究では、アスリート本人ではなくボランティアなどの関係者、およびファミリーを対象として調査、分析を試みた。

調査票は2012年にスペシャルオリンピックスの地区組織を通じて郵送により配布、回収した。対象は、会員であるものの1年以上活動に参加していないボランティア、およびファミリーを対象とした。配布数は201、回収は41（回収率20.4%）であった。調査票配布にあたっては、全て無記名調査票を用いた他、結果は研究目的にのみ使用され、かつ、統計的に処理を行い個人が特定されない旨を調査表に記した。また事前に関係者に調査内容を示し確認と同意を得た上で調査を実施した。

(2) 調査項目と分析方法

質問項目は大きく2群で構成した。一つはスペシャルオリンピックスの活動を休止、あるいは離脱に関する要因12項目で、とりわけ「健康上の理由で活動に参加できない状況

になった」「仕事など生活時間の都合で活動に参加できない」など、回答者側に関する質問群を設定した。もう一群では、「トレーニングレベルが高すぎる」「このスペシャルオリンピックスのスポーツルールは厳しい」「活動場所までの移動手段の確保がたいへん」などSO活動そのものに関係する14の質問項目を設定した。それぞれ「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階尺度で得点を与え、因子分析により活動休止、離脱の要因を検討した。

また、回答用紙の最後に自由記述コメント欄を設けて回答を得た。自由記述コメントは、KJ法（川喜田1967）を用いてグループ編成を行った。具体的には、得られた自由記述コメントについて、記載されている言葉や前後の文脈を検討してカテゴリーを生成して分析に用いた。

このほかに、スペシャルオリンピックスで活動していたときのスポーツ実施状況や回答者の年齢等に関する質問項目を設定した。

(3) 調査結果①（回答者の属性）

回答者に関して、スペシャルオリンピックスでの役割・立場は理事役員等が1名（2.4%）、コーチ5人（12.2%）、コーチ以外のボランティア7人（17.1%）、ファミリー24人（58.5%）であった。（表1）

表1●回答者の基本属性（n=41）

項目	カテゴリー	人数	%
SOでの役割・立場	理事・役員等	1	2.4
	コーチボランティア	5	12.2
	一般（スポーツ場面以外の）ボランティア	7	17.1
	知的障害当事者（保護者等が回答）	24	58.5
	欠損値	4	
活動の頻度	年に数回程度	6	14.6
	月に1～2回	14	34.1
	週に1回程度	6	14.6
	週に2～3回	3	7.3
	具体的な活動に参加していない	9	22.0
	欠損値	3	
活動していた期間	1年未満	6	14.6
	1年 - 3.95年	16	39.0
	3.95 - 7.75年	9	22.0
	7.75年以上	6	14.6
	欠損値	4	
活動休止時の年齢	10代 - 20代	10	24.4
	30代 - 50代	18	43.9
	60代以上	10	24.4
	欠損値	3	

活動をしていた時の頻度については、年に数回程度6人(14.6%)、月に1～2回が14人(34.1%)、週に1回程度が6人(14.6%)、週に2～3回程度が3人(7.3%)、会員登録や寄付等のみで具体的な活動に参加していないが9人(22.0%)であった。

活動期間については平均(5.85) ± 1/2SD(1.90)をもとに区分し、初期段階である1年未満が6人(14.6%)、1年～3.95年が16人(39.0%)、3.95～7.75年が9人(22.0%)、7.75年以上が6人(14.6%)であった。活動休止時の年齢については、10代-20代が10人(24.4%)、30代-50代が18人(43.9%)、60代以上が10人(24.4%)であった。

(4) 調査結果②(活動休止、離脱の因子)

スペシャルオリンピックス活動の休止、離脱の要因について、はじめ主に回答者側の理由に関する12の質問項目の因子分析(固有値1基準、一般化された最小2乗法、プロマックス回転)により、「個人的な理由」「SOに対する関心の喪失」「時間等の都合」「スポーツボランティアに対する関心の喪失」という4つの因子を抽出した。(表2)4因子間の相関は低く、ほぼ無相関であった。

表2●スペシャルオリンピックス活動の休止・離脱理由(1)

因子と質問項目		I	II	III	IV
個人的な理由	健康上の理由で活動に参加できない状況になった(病気などではないが)年齢が高くなってきて活動についていけない	.985	.161	.026	-.137
	土日(余暇時間)はSO以外の別の活動に参加している	.900	-.063	-.143	.284
	SO以外に自分に合うボランティア活動の場を見つけた	.669	-.141	-.001	.093
	SO以外に自分に合うボランティア活動の場を見つけた	.622	.039	-.297	.084
	家庭の事情で活動に参加できない状況になった	.590	-.248	.265	-.388
スペシャルオリンピックスに対する関心の喪失	SOの活動に参加することがわずらわしくなった	-.105	.867	-.266	-.016
	SO以外に自分に合うスポーツ活動の場を見つけた	-.085	.851	.301	-.053
	SOの活動そのものに関心がなくなった	.390	.800	.164	.125
時間等の都合	土日(余暇時間)は主にプライベートな時間として使っている	-.199	-.015	.997	.207
	仕事など生活時間の都合で活動に参加できない	-.015	.233	.907	-.082
スポーツボランティアに対する関心の喪失	ボランティア活動そのものに関心がなくなった	.064	.133	-.028	.886
	スポーツ活動そのものに関心がなくなった	.151	-.218	.324	.684
α係数		.81	.70	.73	.72
下位尺度間相関、平均±SD					
I 2.45±1.06		-	.07	.07	.35
II 2.17±1.01			-	-.07	.30
III 3.45±1.21				-	.17
IV 1.69±0.90					-

続いて、スペシャルオリンピックス活動に関する14の質問項目について、十分な負荷量が得られなかった一項目を除いて因子分析（固有値1、重みなし最小2乗法、バリマックス回転）を行い、「参加動機・条件とのズレ」「活動内容への思惑違い」「移動・時間等の負担」「活動理念・方針に同意できない」という4つの因子を確認した。（表3）4因子間で中位の相関がみられた。

表3 ●スペシャルオリンピックス活動の休止・離脱理由（2）

因子と質問項目		I	II	III	IV
参加動機・条件とのズレ	毎回参加しないといけないという心的なプレッシャーみたいなものがある	.961	.044	.131	.240
	トレーニングレベルが高すぎる	.645	.529	.038	-.047
	1回あたりの活動時間が長い	.572	.236	.170	-.127
	(自分の)年齢が高くなってきてトレーニングに参加できない	.566	.394	.158	.248
	SOでは思ったほど自分の経験や知識が活かせない	.548	.043	.138	-.100
活動内容への思惑違い	SOのスポーツルールは厳しい	.209	.827	.271	.198
	SOの活動ではアスリートへの成果が感じられない	.089	.704	.263	.069
	与えられた役割は自分にとっては負担である	.224	.530	.393	.052
移動・時間等の負担	交通費などの負担がたいへん	.177	.242	.864	.115
	活動場所までの移動手段の確保がたいへん	.105	.260	.719	.120
	活動の頻度（回数）が多い	.302	.486	.596	-.266
	活動のために時間をやりくりするのが大変	.346	.113	.379	-.339
活動理念・方針に同意できない	SOの理念・活動方針に同意できないところがある	.049	.221	.140	.967
α係数		.86	.81	.80	
下位尺度間相関、平均±SD					
I 2.37±1.00		-	.54**	.47**	.24
II 2.02±.84			-	.61**	.36*
III 2.59±1.01				-	.11
IV 2.21±1.27					-

*P < .05 **P < .01

（5）調査結果③（自由記述コメント分類）

今回回収した41件の調査票のうち、25件で自由記述コメントの記載があり、KJ法（川喜田1967）を用いて7つのカテゴリーに分類した。

具体的には、「メンバー間の関係・雰囲気」「仕事などの都合」「移動・活動場所等の制約」「活動内容に関する課題」「体調などの理由」「経済的な理由」「その他（感謝）」というカテゴリーに集約した。（表4）

表4 ● S O活動の休止・離脱理由（3）自由コメントの分類

カテゴリー	実際の回答
メンバー間の関係・雰囲気	<ul style="list-style-type: none"> ・会費を払わないで役員をつとめていたり、大会に参加する人がいて疑問を感じた。 ・前から参加しているグループの方たちがいて、新しいメンバーは入りにくい状況だった。 ・同じ障害を持っている仲間全員で差別なく楽しめる場所だと思っていたがそうではなかった。一般の教室の方が差別感なく扱ってくれると感じた。 ・一般の教室でレッスンする方が気楽だと思った。結局、日の当たるメンバーは一緒だと思った。 ・コーチボランティアとして不要というような扱いを受けた。
仕事などの都合	<ul style="list-style-type: none"> ・就職したので休止している。 ・本人が就職をして、本人としても休日は休息したいようだ。 ・本人の仕事の都合上、土日の活動に参加できなくなった。 ・本人が仕事に就いた。大変お世話になった。都合がつけばまた参加するかもしれない。 ・私（ファミリー）が仕事で参加できなくなったため。コーチの方々が本当によくみてくれていて感謝している。
移動・活動場所等の制約	<ul style="list-style-type: none"> ・片道100kmの移動が大変だった。 ・参加したいが活動場所が遠くて行けない。 ・会場までと私（ファミリー）の都合で参加できない。 ・本人に合う内容、場所、時間のものがあまりなかった。
活動内容に関する課題	<ul style="list-style-type: none"> ・障害の程度に合わせた活動プログラムを組んだ方がいい。 ・S Oでの活動だけでは限界を感じた。 ・体を動かす楽しみを、と思い参加していたが、「成果」であったり、一部のファミリーだけの集まりのように感じた。 ・本人が運動が好きではなかった。
体調などの理由	<ul style="list-style-type: none"> ・両親の介護のためやむなく休止した。すぐ再開できるだろうと思っていたが、長引いている。いずれ再開したいと思っている。 ・病気の都合で活動場所まで行けなくなった。 ・転居と病気。
経済的な理由	<ul style="list-style-type: none"> ・このような活動は経済的にゆとりのある人でないといけないと実感している。 ・ファミリーの参加が前提となっている雰囲気、S Oは恵まれた特別な人たちの活動だと感じる。
その他（感謝）	<ul style="list-style-type: none"> ・息子にとってとても有意義な時間をすごさせていただき感謝している。残念ながら発作が頻繁に出るようになり参加できなくなった。 ・就学前のアスリートたちの活動プログラムを担当していた。楽しく、仕事にも役立った。すばらしい経験をさせていただき感謝している。

4. 考察

(1) スペシャルオリンピックス活動の休止、離脱の要因

本研究では、スペシャルオリンピックス活動に関して、一度は会員登録したものの活動を休止、あるいは離脱する要因等の検討を行った。その結果、大まかに参加者（回答者）

側の理由に関するものと、SO 組織側や活動内容に関するいくつかの因子、およびカテゴリーを確認した。

このうち健康面などの「個人的な理由」因子や、仕事など「時間等の都合」因子については、参加者の生活上の事情などが影響しており、たとえばスポーツ場面でのマネジメント等とは直接関係のないものとする。実際、回答者の 37% が休止・離脱する以前に約 4 年以上の活動期間があり（表 1）、スペシャルオリンピックスで活動することに納得、一定の理解があったものと考えられる。

一方、「SO に対する関心の喪失」、あるいは「スポーツボランティアに対する関心の喪失」因子については参加者の、スペシャルオリンピックスでの活動内容に対する意識が表れているものと考えられる。これは第 2 質問群の因子分析の結果で得られた、「参加動機・条件とのズレ」「活動内容への思惑違い」因子も関係していると考えられ、運営マネジメント等の影響もあると推察する。

自由記述コメントにおいても、仕事や活動場所への移動、体調面といった参加者側の理由に関するカテゴリーに加え、「メンバー間の関係・雰囲気」「活動内容に関する課題」カテゴリーでも多くのコメントが得られた（表 4）。スペシャルオリンピックス組織にとっては厳しいコメントも確認できる。

参加者が思い描いていた障害者スポーツの在り方や自分の関わり方と、実際の活動内容や団体の理念、方針が合っていないればこのような結果になってしまい、最終的に活動の休止や離脱につながる可能性がある。また、関係者の意識や雰囲気が結果的にアスリートのスポーツの成果や継続性に影響を及ぼしてしまうことが懸念される。スペシャルオリンピックスの目標、理念、方針などを共有、再確認する機会を設ける、あるいは参加者などで意見、情報交換する機会を充実させるなどの工夫が求められる。

さらに、因子分析からも、自由コメントからも会場までの移動に関する要因が抽出され、会場や移動に関する多くのニーズ、課題があることを確認した。とりわけ SO に参加するアスリートたちは一人での移動に制約がともなうことが少なくない。移動や活動場所の工夫は今後、SO 活動を推進していくために必要な視点だと考える。

（2）まとめと今後の課題

休止、離脱者の対象者のうちアスリート分についてはファミリー等がかかわって回答していると考えられ、アスリート本人の意向に反して休止、離脱という選択を余儀なくされてしまったことも否定できない。

また、今回の調査では回収率が低く（20.4%）、休止、離脱者に対する追跡調査の限界を感じた。回答しないという姿勢そのものがスペシャルオリンピックス活動に対するメッセージとなっている可能性もある。今後はこれらをふまえ、研究を進めていく必要がある。文献：川喜田二郎（1967）『発想法』中公新書。

6

ナショナルゲームの記録分析

—事例編：陸上競技—

渡邊浩美（事務局長）、岩沼聡一郎、志村健一、田引俊和、仲野隆士、松本耕二
研究グループ（事務局長以下50音順、下線は本調査の担当者）

1. 研究の背景

スペシャルオリンピックス日本は、1994年11月の設立以来、知的障がいのある人たちの自立と社会参加の促進を図るためのスポーツ活動の提供を使命とし、多様な人々が互いに尊重しあい共に生きていく社会の実現に寄与するための事業を推進してきた。2014年に設立20周年を迎えるにあたり、国内のスペシャルオリンピックス活動の実績を調査研究することにより、スペシャルオリンピックスの効果を検証し、日本社会における本活動の有益性を明らかにするものであった。

2. 目的

本研究では、過去に開催されたSO日本ナショナルゲーム（以後、NG）出場アスリートの1) 競技出場アスリート特性、2) 出場種目の傾向、3) 競技（予選・決勝）記録、4) 大会（開催年）別記録の比較、5) 大会前事前申告記録と大会記録の比較について明らかにすることである。

3. 方法

本研究では、以下の記録を収集、整理して分析をすすめた。

1) データ：過去に実施された夏季NG（4大会：1998 神奈川、2002 東京、2006 熊本、2010 大阪）の競技記録（データ）を用いた。

2) 抽出データ

(1) 競技記録（事前申告、予選、決勝）

(2) 競技種目：陸上競技（個人18種目、団体4種目）

※各大会競技記録は、大会、競技種目ごとに紙媒体もしくは電子ファイルに保存されていた。しかしながら大会ごとの実施競技種目や記録形式が異なること、また時間的限界から「陸上競技」のみを採用した。データのカウン트는、予選-決勝の両方、もしくはどちらかの競技記録、937サンプルであった（表1参照）。また種目は、過去の大会で実施された個人18種目、団体4種目を抽出した。

3) 分析

(1) 競技記録集計

- 競技種目別（予選、決勝別）（性、年齢別）
- 記述統計（代表値）：平均値、標準偏差(SD)、中央値、最小値、最大値
- 検証：分散分析（tおよびF検定）

年齢×性、大会別、性別、年齢別、予選×決勝

(2) 大会前自己申告記録と大会記録の比較

- ・事前申告記録と決勝記録の検証

対応のある t 検定（データ抽出の関係で 2010 大阪大会のみ）

表1●大会種目別記録（サンプル）数

大会 種目	1998神奈川大会			2002東京大会			2006熊本大会			2010大阪大会			合計			
	女子	男子	混合	女子	男子	混合	女子	男子	混合	女子	男子	混合	女子	男子	混合	計
個人種目																
25m歩行	2	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	3	3	0	6
50m歩行	0	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	3
50m走	11	14	0	21	37	0	3	10	0	8	8	0	43	69	0	112
100m走	4	27	0	21	48	0	11	34	0	12	47	0	48	156	0	204
200m走	4	9	0	8	20	0	1	8	0	4	10	0	17	47	0	64
400m走	1	7	0	3	7	0	1	4	0	2	10	0	7	28	0	35
800m走	1	10	0	3	17	0	2	6	0	0	9	0	6	42	0	48
1500m走	0	8	0	1	31	0	1	25	0	3	36	0	5	100	0	105
3000m走	0	4	0	1	5	0	2	12	0	0	9	0	3	30	0	33
5000m走	0	2	0	1	9	0	3	13	0	1	16	0	5	40	0	45
25m車いす競争	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ボール投げ(テニスボール)	8	10	0	13	14	0	0	1	0	0	0	0	21	25	0	46
ソフトボール投げ	3	12	0	3	28	0	3	6	0	1	6	0	10	52	0	62
砲丸投げ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1	0	1	2	0	3
立ち幅跳び	3	15	0	10	19	0	1	4	0	2	1	0	16	39	0	55
走り幅跳び	0	5	0	3	12	0	1	7	0	1	5	0	5	29	0	34
走り高跳び	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
団体種目																
4×100リレー	0	4	3	3	15	0	0	23	0	1	20	0	4	62	3	69
4×400リレー	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	4	0	0	7	0	7
4×100ユニファイドリレー	2	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	4	0	6
4×400ユニファイドリレー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	39	133	3	92	266	0	29	157	0	36	182	0	196	738	3	937
	175			358			186			218						

※競技記録の予選と決勝の両方、もしくはそのいずれかがある場合を1とカウントした。なお今回の競技記録の延べ数は1440である。

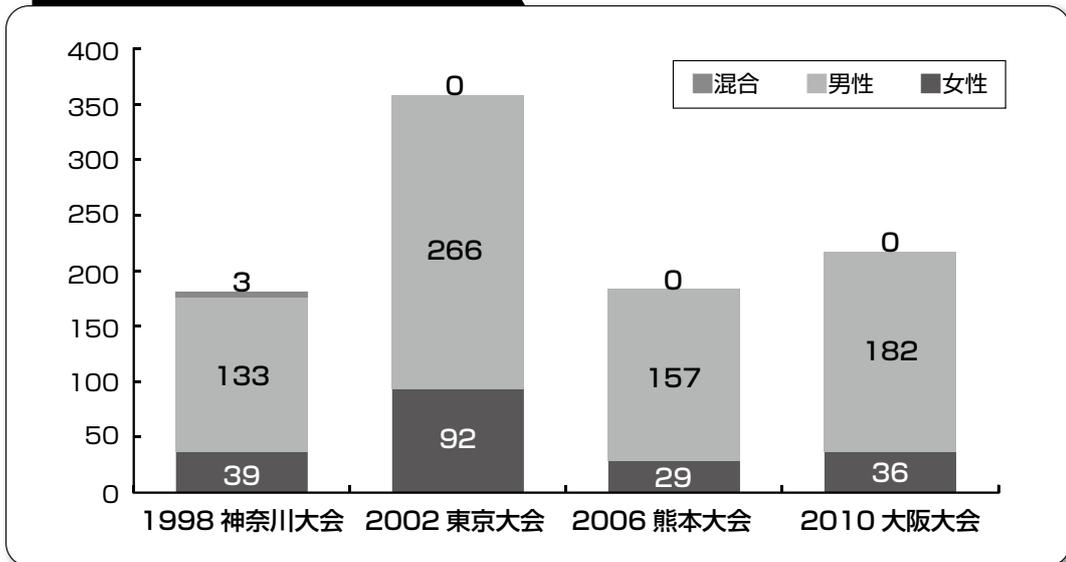
1998年に開催された第1回大会では175、第2回東京大会2002では358、第3回熊本大会2006では186、そして第4回大阪大会では218であり、総計937サンプルを扱っている。なお、この記録（サンプル）は、予選と決勝の両方、もしくはそのいずれかの記録がある場合をカウントした。

4. 結果

1) サンプル

大会ごとのサンプル数は、大会の規模（参加者数）が影響するが、東京大会が最も多かった。第1回神奈川大会では混合種目の記録もあったが他の大会では実施されていない。性別でみた場合、女子の比率は、神奈川大会22.0%、東京大会25.6%、熊本大会15.6%、大阪大会16.5%で全体では20.9%と男女比はおおよそ4:1であった。

図1●大会別サンプル数（性別）



2) 出場種目の傾向

これまでのNGにおける出場種目は「100m 走」(21.8%) が最も多い。次いで「50m 走」(11.9%) 「1500m 走」(11.2%) の順であった。投擲種目では「ソフトボール投げ」(6.9%)、「ボール投げ」(4.9%) に、また団体種目のリレーでは「4 × 100m」(7.3%) であった。全国障害者スポーツ大会にはないSO オリジナル種目、「25 m 歩行」、「50 m 歩行」、「テニスボール投げ」、「ユニファイド・リレー」が参加あった。性別でみた場合、男子は全種

図2●サンプルの男女別出場種目数

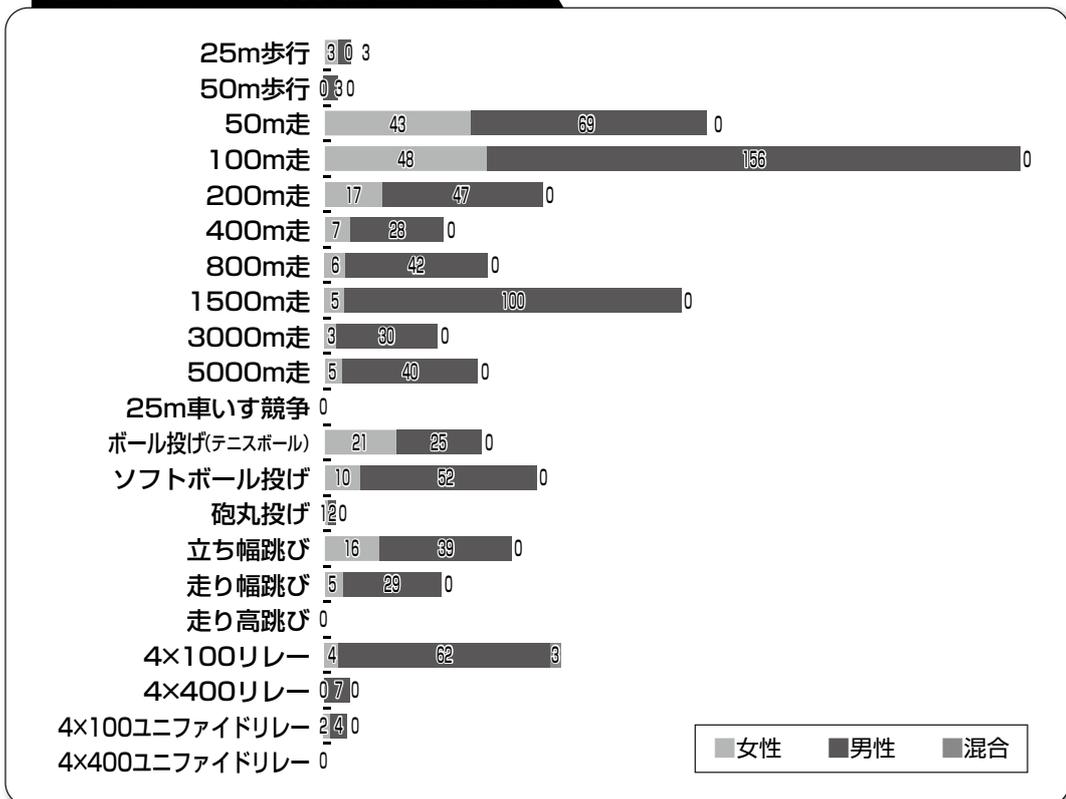


表2●競技種目別記録

目において女子よりも割合が高かった。女子は、50 m走で38.4%、100 m走では21.8%で、他の種目に比較すると高い参加率であった。

3) 競技種目別記録

NGの競技種目別の最高記録と最低記録（予選および決勝記録）を一覧にした（表2）。

各種目の最高記録は、50m 走で7.10 秒、100m 走で12.36 秒、200 m 走で26.10 秒、1500 m 走では4分49秒（289.00 秒）、3000 m 走では10分14秒01（614.01 秒）であった。この最高記録は、いずれの種目においても一般（健常者）の競技会における最高記録には劣っている。

しかし文部科学省による体力・運動能力調査（平成25年度）の年齢別テストと比較した場合、立ち幅跳び（2.38m）は一般のどの年代の平均記録をも上回っている。また50 m走（7.10 秒）は6歳から19歳までの一般の平均記録より優れていることがわかった。

翻って最高記録に限らず、ここでは最低記録にも注目してみたい。例えば100m 走では最高記録が12.36 秒に対し最低記録は65.79 秒であった。この最高-最低記録の差は53.43 秒であった。ボール投げ（テニスボール）においては最高記録が52.77 mであるのに対し、最低記録は0.10 mであった。その差は52.67 mである。これらの差をどのように考えるか。SOは知的障がい者のスポーツを推進する組織である。ここではトップアスリートのみならず、さまざまなレベルのアスリートが出場する。そのアスリートの一人ひとりがベストを尽くしチャレンジする精神を貴び平等にその機会を提供することがSOの特徴であり、その場がNGである。これらが各種目の最低記録に反映されているとみることができる。SOではアスリートがチャレンジする精神を持っている限りその努力と記録を大切にす。誤解を恐れず言うならば、SOは高い競技水準をもつトップアスリートに対し、低い競技水準の“ボトム”アスリートをも等しく大切にすることが、この大会の特徴でもある。このことはSOにかかわるすべての人たちが認識しており、その表れが記録結果に反映されている。これらNG記録の特徴として、最高記録と最低記録の差が大きいことも明らかとなった。

なお、別表1に全競技種目の年代別、性別、予選・決勝別記録の代表値をまとめているので参照されたい。

種目	NG記録		
	最高記録	最低記録	
25m歩行	5.15	—	54.4 秒
50m歩行	22.90	—	28.60 秒
50m走	7.10	—	53.50 秒
100m走	12.36	—	65.79 秒
200m走	26.10	—	76.06 秒
400m走	62.84	—	148.60 秒
800m走	127.32	—	480.60 秒
1500m走	289.00	—	800.50 秒
3000m走	614.01	—	1369.80 秒
5000m走	1059.54	—	2242.31 秒
ボール投げ(テニスボール)	52.77	—	0.10 m
ソフトボール投げ	49.81	—	4.13 m
砲丸投げ	8.74	—	5.32 m
立ち幅跳び	2.38	—	0.38 m
走り幅跳び	4.83	—	1.54 m
4×100リレー	54.00	—	415.40 秒
4×400リレー	278.92	—	446.16 秒
4×100ユニファイドリレー	59.40	—	84.50 秒
※記録のない種目は除外した。			

表3●大会の競技種目別記録検定結果

種目	記録	開催年別			
		df	F値	p	
個人種目					
25m歩行	予選				
	決勝	2	.209	.822	
50m歩行	予選				
	決勝	1	5.829	.250	
50m走	予選	1	.287	.594	
	決勝	3	.318	.812	
100m走	予選	1	1.098	.297	
	決勝	3	.424	.736	
200m走	予選	1	1.149	.291	
	決勝	3	1.041	.381	
400m走	予選	1	1.919	.181	
	決勝	3	.204	.893	
800m走	予選	1	5.219	.031	*
	決勝	3	2.097	.115	
1500m走	予選	1	14.377	.000	***
	決勝	3	5.164	.002	**
3000m走	予選				
	決勝	3	3.464	.029	*
5000m走	予選				
	決勝	3	2.926	.045	*
ボール投げ(テニスボール)	予選				
	決勝	2	2.262	.117	
ソフトボール投げ	予選	1	3.022	.091	
	決勝	3	1.911	.138	
砲丸投げ	予選	1	.104	.801	
	決勝				
立ち幅跳び	予選	1	.006	.941	
	決勝	3	1.954	.134	
走り幅跳び	決勝	1	.557	.465	
	予選	3	1.604	.211	
団体種目					
4×100リレー	予選	1	3.892	.056	
	決勝	3	2.118	.106	
4×400リレー	予選				
	決勝	1	.730	.432	
4×100ユニファイドリレー	予選				
	決勝	1	1.657	.267	

※記録のない種目は除外した。検定ができない場合は空欄 *p<.05, **p<.01, ***p<.001

4) 大会(開催年)別記録の比較

ここでは競技記録が各大会(神奈川(1998)、東京(2002)、熊本(2006)、大阪(2010))のそれぞれの大会の記録に差があるかどうかを検証した。表3には大会の競技種目別記録の分散分析(F検定)結果を表示している。

大会による記録(予選、決勝)の差は、全18種目中4種目(800m走、1500m走、3000m走、5000m走)のみに有意な差がみられた。さらに有意差がみられた4種目の開催年による多重比較を行った結果、800m走の予選では、東京大会の記録の平均値が大阪大会の記録より劣っている(東京(268.05)<大阪(191.87))。さらに1500m走の予選記録で、東京大会(470.6)より大阪大会(390.75)、また決勝でも東京大会(486.8)より神奈川、熊本、大阪大会のそれぞれの方が好記録であった。以上のことから有意差があった競技種目(800m走と1500m走)では、東京大会の記録が他の大会の記録よりも有意に劣っていたことがわかる。

しかしながら、大会全体の記

録という視点でみた場合、全18種目中14種目において有意差はみられなかった。以上のことから、大会による差はないと結論付けることができよう。

なお、別表2に開催年別の競技種目別記録をまとめているので参照されたい。

5) 大会前事前申告記録と大会記録の比較

ここでは、NG大会がアスリートの記録の成長に繋がっているかどうかを明らかにするためにNG大会前の事前申告記録と大会期間中の決勝時の記録について対応のあるt検定

表3●大会前事前申告記録と大会決勝記録（2010大阪大会）

個人種目 出場種目	記録	予選（事前申告）×決勝			対応サンプルの検定		
		平均値	N	標準偏差	t値	df	p
50m走	申告	11.85	13	2.95	-0.58	12	
	決勝	12.06	13	3.29			
100m走	申告	21.39	45	9.65	3.43	44	**
	決勝	19.83	45	8.55			
200m走	申告	35.77	9	5.94	3.04	8	*
	決勝	33.34	9	5.40			
400m走	申告	100.31	5	12.19	3.81	4	*
	決勝	88.62	5	10.50			
800m走	申告	218.88	8	110.88	1.80	7	
	決勝	197.88	8	78.89			
1500m走	申告	420.59	26	93.71	2.99	25	**
	決勝	398.25	26	90.20			
3000m走	申告	822.47	14	123.26	3.96	13	**
	決勝	777.02	14	123.14			
5000m走	申告	1549.70	15	399.09	1.32	14	
	決勝	1439.63	15	303.98			
ソフトボール投げ	申告	25.23	9	10.65	-1.35	8	
	決勝	26.62	9	11.36			
立ち幅跳び	申告	1.76	5	0.49	-2.40	4	
	決勝	1.85	5	0.51			
走り幅跳び	申告	3.48	8	0.56	-1.14	7	
	決勝	3.57	8	0.65			
団体種目							
4×100リレー	申告	122.61	6	118.08	1.49	5	
	決勝	111.55	6	100.30			

※ *P < .05 **P < .01

を用いて検証した（表3）。その結果、12種目の内、100m走、200m走、400m走、1500m走、3000m走の5種目で有意差がみられ、決勝記録が事前申告記録よりも有意に向上していた。また有意差はみられなかった7種目においても、50m走を除く6種目で記録（平均値）は向上した結果であった。これらの結果から、NGエントリー時点よりNG期間中の記録が有意に向上しているということができ、NG大会の開催自体がアスリートのパフォーマンスを向上させていると解釈することができる。

5. まとめ

本調査では、過去に開催されたSO日本ナショナルゲーム（以後、NG）出場アスリートの1)競技出場アスリート特性、2)出場種目の傾向、3)競技（予選・決勝）記録、4)大会（開催年）別記録の比較、5)大会前事前申告記録と大会記録の比較について明らかにすることであった。そこで過去に実施された夏季NG（4大会：1998神奈川、2002東京、2006熊本、

2010 大阪) の 937 の競技記録(データ)を用いて分析した結果、以下のことが明らかとなった。

1) 競技出場アスリート(サンプル)の特性

- 大会ごとのサンプル数は、東京大会が最も多かった。
- 性別では、女子の比率は全体では 20.9%と男女比は 4:1 であった。

2) 出場種目の傾向

- アスリートの出場種目は「100m 走」が最も多かった。次いで「50m 走」、「1500m 走」であった。投擲種目では「ソフトボール投げ」、「ボール投げ」であった。団体種目のリレーでは「4 × 100m」であった。
- 性別では、男子は全種目において女子よりも出場割合が高い。女子は、50 m 走で 38.4%、100 m 走では 21.8%の割合であった。

3) 競技種目別記録

- 最高記録は、50m 走で 7.10 秒、100m 走で 12.36 秒、200 m 走で 26.10 秒、1500 m 走では 4 分 49 秒(289.00 秒)、3000 m 走では 10 分 14 秒 01 (614.01 秒) 等であった。
- 最高記録は、いずれの種目においても一般(健常者)の競技会における最高記録には劣っていた。
- 文部科学省による体力・運動能力調査(平成 25 年度)の年齢別テストと比較した場合、立ち幅跳びではどの年代の平均値よりも、また 50 m 走では 6 歳から 19 歳までの平均値の記録よりも上回る記録であった。
- 種目によって、最高記録と最低記録の差が大きい。

4) 大会(開催年)別記録の比較

- 大会ごとにみた記録(予選、決勝)は、全 18 種目中 4 種目(800 m 走、1500 m 走、3000 m 走、5000 m 走)に有意な差がみられた。
- 東京大会の 800 m 走では予選記録が大阪大会の記録より、また同じく東京大会の 1500 m 走では予選と決勝の記録が他の大会の記録よりも有意に劣っていた。
- 大会全体の記録という視点でみた場合、全 18 種目中 14 種目において有意差はみられないことから、これまでの大会記録には差がないといえる。

5) 大会前事前申告記録と大会記録の比較

- 12 種目の内、100m 走、200m 走、400 m 走、1500m 走、3000m 走の 5 種目で有意差がみられ、決勝記録が事前申告記録よりも有意に向上していた。
- 統計的有意差はみられなかった 7 種目でも、50 m 走を除く 6 種目で記録(平均値)は向上した結果であった。
- これらの結果から、NG エントリー時点の記録より NG での記録が向上し、NG 大会の開催自体がアスリートのパフォーマンスを向上させる機会となり得ているといえる。

6. 課題

今回記録分析は、時間的制約により、陸上競技のみにとどまった。今後は他の競技種目も分析し、プログラムの現場にフィードバックすることが大切である。また各地区組織で行われるスポーツプログラムでの記録分析が大切であることは言うまでもない。今後もナショナルゲームの記録のみにとどまらず継続的に分析を進めたい。これらアスリートの運動能力・水準の実態把握は、競技の客観的指標となりトレーニング時の目標設定の一助となる。

別表 SO日本ナショナルゲーム陸上競技種目別記録一覧 (年齢×性別)

種目	8-11歳										12-15歳										16-21歳										22-29歳										30歳以上											
	平均値		SD		n		中央値		最大値		最小値		最大値		最小値		最大値		最小値		最大値		最小値		最大値		最小値		最大値		最小値		最大値		最小値		最大値															
	平均値	SD	n	中央値	最大値	最小値	最大値	最小値	平均値	SD	n	中央値	最大値	最小値	平均値	SD	n	中央値	最大値	最小値	平均値	SD	n	中央値	最大値	最小値	平均値	SD	n	中央値	最大値	最小値	平均値	SD	n	中央値	最大値	最小値														
25m歩行	男子	6.80	1	6.80	6.80	6.80	6.80	6.80	10.10	1	10.10	10.10	10.10	10.10	12.70	1	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	1	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	1	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70	12.70														
	女子	5.40	1	5.40	5.40	5.40	5.40	5.40	11.40	1	11.40	11.40	11.40	11.40	5.15	1	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	1	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	1	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15	5.15														
	男子	30.80	2	33.858	30.60	6.80	54.40	30.80	10.75	2	0.919	10.75	10.10	11.40	8.93	2	5.538	8.83	5.15	12.70	25.10	2	1.131	25.10	24.30	25.90	24.00	2	1.556	24.00	22.80	25.10	24.00	2	1.31	25.10	24.30	25.90														
	女子	28.60	1	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60	28.60													
50m歩行	男子	14.42	7	9.506	10.48	8.00	33.50	14.42	10.10	14	4.712	11.15	8.40	18.20	12.39	4	2.536	11.83	10.00	15.91	11.85	7	1.635	12.40	9.30	13.70	14.82	7	7.707	11.07	8.20	26.70	14.82	7	7.707	11.07	8.20	26.70	14.82	7	7.707	11.07	8.20	26.70								
	女子	14.69	13	5.847	11.40	9.50	26.30	14.69	11.40	16	4.166	11.58	8.40	5.90	12.09	7	3.046	8.80	8.56	10.13	9.00	4	0.846	8.80	8.56	10.13	14.69	13	5.847	11.40	9.50	26.30	14.69	13	5.847	11.40	9.50	26.30	14.69	13	5.847	11.40	9.50	26.30								
	男子	15.50	10	7.897	11.90	7.80	28.30	15.50	11.16	26	5.273	9.59	7.20	36.14	10.67	9	2.575	10.40	8.10	16.23	10.32	11	0.832	10.32	8.60	8.00	15.50	15.50	10	7.897	11.90	7.80	28.30	15.50	10	7.897	11.90	7.80	28.30	15.50	10	7.897	11.90	7.80	28.30							
	女子	14.62	14	8.316	10.78	8.00	33.50	14.62	10.78	35	6.569	10.10	7.70	18.20	11.01	7	2.535	10.13	8.56	10.13	9.32	11	0.832	10.13	8.56	10.13	14.62	14	8.316	10.78	8.00	33.50	14.62	14	8.316	10.78	8.00	33.50	14.62	14	8.316	10.78	8.00	33.50								
100m走	男子	23.07	6	12.391	17.60	15.20	48.60	23.07	17.60	30	15	4.385	10.62	17.20	20.72	7	2.146	20.50	18.90	25.20	24.48	11	1.116	11	2.487	11.65	8.00	15.97	18.89	17	5.002	17.70	12.90	29.42	17.12	40	3.249	16.15	13.22	25.00	19.00	26	6.355	16.23	13.01	41.50	18.56	7	4.988	18.34	13.90	28.90
	女子	23.10	10	10.677	18.70	15.10	50.90	23.10	10.677	20	7.121	4.859	19.60	15.10	31.12	22.15	10	3.676	21.13	17.80	30.36	22.57	7	3.718	21.90	17.53	28.50	23.10	10	10.677	18.70	15.10	50.90	23.10	10	10.677	18.70	15.10	50.90	23.10	10	10.677	18.70	15.10	50.90							
	男子	20.95	2	17.324	30.95	18.70	43.20	20.95	18.70	33	7.558	17.90	55	3.827	15.90	12.36	28.40	17.40	43	3.901	15.90	13.16	30.10	17.54	12	3.412	17.17	14.10	25.60	20.95	2	17.324	30.95	18.70	43.20	20.95	2	17.324	30.95	18.70	43.20	20.95	2	17.324	30.95	18.70	43.20					
	女子	21.59	4	9.678	17.10	9.50	40.70	21.59	17.10	44	9.678	17.10	9.50	40.70	21.59	4	9.678	17.10	9.50	40.70	21.59	4	9.678	17.10	9.50	40.70	21.59	4	9.678	17.10	9.50	40.70	21.59	4	9.678	17.10	9.50	40.70	21.59	4	9.678	17.10	9.50	40.70								
200m走	男子	38.60	4	9.450	35.03	31.90	52.44	38.60	35.03	31	9.450	35.03	31.90	52.44	38.60	4	9.450	35.03	31.90	52.44	38.60	4	9.450	35.03	31.90	52.44	38.60	4	9.450	35.03	31.90	52.44	38.60	4	9.450	35.03	31.90	52.44	38.60	4	9.450	35.03	31.90	52.44								
	女子	40.84	7	9.735	34.70	26.50	65.60	40.84	34.70	26	9.735	34.70	26.50	65.60	40.84	7	9.735	34.70	26.50	65.60	40.84	7	9.735	34.70	26.50	65.60	40.84	7	9.735	34.70	26.50	65.60	40.84	7	9.735	34.70	26.50	65.60	40.84	7	9.735	34.70	26.50	65.60								
	男子	39.38	5	9.215	35.82	31.70	53.55	39.38	35.82	31	9.215	35.82	31.70	53.55	39.38	5	9.215	35.82	31.70	53.55	39.38	5	9.215	35.82	31.70	53.55	39.38	5	9.215	35.82	31.70	53.55	39.38	5	9.215	35.82	31.70	53.55	39.38	5	9.215	35.82	31.70	53.55								
	女子	41.14	9	16.259	35.36	26.60	70.60	41.14	35.36	26	16.259	35.36	26.60	70.60	41.14	9	16.259	35.36	26.60	70.60	41.14	9	16.259	35.36	26.60	70.60	41.14	9	16.259	35.36	26.60	70.60	41.14	9	16.259	35.36	26.60	70.60	41.14	9	16.259	35.36	26.60	70.60								
400m走	男子	40.51	14	13.769	35.59	26.60	70.60	40.51	35.59	26	13.769	35.59	26.60	70.60	40.51	14	13.769	35.59	26.60	70.60	40.51	14	13.769	35.59	26.60	70.60	40.51	14	13.769	35.59	26.60	70.60	40.51	14	13.769	35.59	26.60	70.60	40.51	14	13.769	35.59	26.60	70.60								
	女子	79.90	1	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	1	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	1	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	1	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	1	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90	79.90											
	男子	105.10	2	27.172	103.10	85.90	124.68	105.10	103.10	85	27.172	103.10	85.90	124.68	105.10	2	27.172	103.10	85.90	124.68	105.10	2	27.172	103.10	85.90	124.68	105.10	2	27.172	103.10	85.90	124.68	105.10	2	27.172	103.10	85.90	124.68	105.10	2	27.172	103.10	85.90	124.68								
	女子	17.90	3	3.272	18.50	13.20	33.80	17.90	18.50	13	3.272	18.50	13.20	33.80	17.90	3	3.272	18.50	13.20	33.80	17.90	3	3.272	18.50	13.20	33.80	17.90	3	3.272	18.50	13.20	33.80	17.90	3	3.272	18.50	13.20	33.80	17.90	3	3.272	18.50	13.20	33.80								
800m走	男子	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60											
	女子	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	1	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60	148.60											
	男子	461.85	2	26.517	461.85	443.10	480.60	461.85	443.10	2	26.517	461.85	443.10	480.60	461.85	2	26.517	461.85	443.10	480.60	461.85	2	26.517	461.85	443.10	480.60	461.85	2	26.517	461.85	443.10	480.60	461.85	2	26.517	461.85	443.10	480.60	461.85	2	26.517	461.85	443.10	480.60								
	女子	350.03	2	70.004	324.70	275.20	374.20	350.03	275.20	2	70.004	324.70	275.20	374.20	350.03	2	70.004	324.70	275.20	374.20	350.03	2	70.004	324.70	275.20	374.20	350.03	2	70.004	324.70	275.20	374.20	350.03	2	70.004	324.70	275.20	374.20	350.03	2	70.004	324.70	275.20	374.20								
1500m走	男子	614.40	3	63.998	648.00	540.80	654.60	614.40	540.80	3	63.998	648.00	540.80	654.60	614.40	3	63.998	648.00	540.80	654.60	614.40	3	63.998	648.00	540.80	654.60	614.40	3	63.998	648.00	540.80	654.60	614.40	3	63.998	648.00	540.80	654.60	614.40	3	63.998	648.00	540.80	654.60								
	女子	551.53	3	41.888	557.20	507																																														

種目	1998 神奈川県		2002 東京		2006 熊本		2010 大阪																		
	n	sd	n	sd	n	sd	n	sd																	
立ち幅跳び	0.96	3.168	1.05	0.77	1.17	3.688	1.48	0.38	1.21	6.439	1.54	0.39	1.62	1.23	2.233	1.23	1.06	1.39	3.58	3.309	1.38	1.26	8.09		
男子	3		3		6		6		6		6		6	2		2	2	2	2	3		3	3	3	
女子	0.80	4.165	0.82	0.80	0.98	1.92	6.291	1.89	1.47	2.29	4.75	0.86	1.82	1.78	3.306	1.70	0.56	1.59	1.70	1.78	3.296	1.70	1.69	1.68	
男子	4		4		9		9		9		9		9	10		10	10	10	10	4		4	4	4	
女子	0.96	3.168	1.05	0.77	1.07	1.78	9.420	1.89	0.93	2.26	1.59	0.61	2.38	1.41	10.449	1.38	0.66	2.09	1.78	4.099	1.74	1.72	1.72	1.93	
男子	3		3		9		9		9		9		9	10		10	10	10	10	6		6	6	6	
女子	0.80	4.165	0.82	0.80	0.98	1.48	15.603	1.57	0.40	2.26	1.43	16.474	1.49	0.56	2.38	1.41	10.449	1.38	0.66	2.09	1.58	7.317	1.72	0.99	1.93
男子	4		4		15		15		15		15		15	16		16	16	16	16	7		7	7	7	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		5		5		5		5		5	6		6	6	6	6	2		2	2	2	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.683	3.26	2.35	4.83	3.28	13.713	3.05	2.36	3.03	3.03	3.03	3.03	3.23	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	3.13	1.313	3.13	3.13	4.96	1	4.56	4.96	4.56	2.13	3.662	1.85	2.89	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	2.98	3.66	2.021	3.66	3.64	3.67	
男子	1		1		11		11		11		11		11	11		11	11	11	11	3.03	2.283	3.03	3.03	3.23	
女子	2.84	2.764	2.84	2.30	3.38	4.68	4.68	4.68	4.68	3.15	1.1	6.													

7

スペシャルオリンピックス日本 20 年の検証まとめ

スペシャルオリンピックス日本が目指すもの

国内におけるスペシャルオリンピックス活動は、前身の日本スペシャルオリンピックス委員会での取り組みを経て、1994年に「スペシャルオリンピックス日本（SON）」という名称で始まりました。熊本から組織の基盤を築く運動を開始し、早いもので20年の歴史が刻まれました。その間の関係者、特に初代会長の細川佳代子さんをはじめとするSONスタッフの方々の精力的なご尽力により、今日すべての都道府県にSON地区組織が誕生し様々なプログラムやイベントを展開するまでに発展しました。

周知の通り、ゼネラルオリエンテーションと称する研修を受けることがSOの活動に参加するスタートとなります。その際、SOの理念として「SOが提供する各種のスポーツのトレーニングプログラムや競技会にアスリートが参加することは、アスリートにとって身体的・社会的・精神的な効果があります。さらにはアスリートの家族や地域社会への効果もあります」と説明されます。

この度の20周年記念誌において私たち Team SOS は、SOのトレーニングプログラムや競技会への参加が、実際どの程度アスリートに身体的・社会的・精神的な効果をもたらせているのかという核心部分への検証を試みました。おそらく、このようなアプローチは過去には実施されていないと思います。

スペシャルオリンピックス 20 年の研究チーム Team SOS

今回の調査研究報告書は、「大学」という教育研究機関に勤務する、いわゆる研究者らによって組織された研究チーム、スペシャルオリンピックス・スタディーズ（SOS：Special Olympics Studies）によるものです。全員、アスリートともにスポーツプログラム活動に参加するコーチでもあります。

スペシャルオリンピックス日本設立20周年事業として位置づけ、全国の地区組織のスポーツプログラム、競技会、ナショナルゲームなどの活動は、アスリートをはじめボランティアやファミリー、スタッフにどのような効果、影響があるのかを学際的なレベルで明らかにすることを目的として発足しました。

限られた時間、経済的制約の中で得られた知見は、20周年を迎えたスペシャルオリンピックス日本のこれまでの活動の効果とその有益性を学際的なレベルで多角的に検証し、一定の結果を示せたと考えています。この結果が、スペシャルオリンピックス日本、あるいは全国の障害者スポーツの発展に少しでも寄与できれば幸いに思います。

今後に向けて

スペシャルオリンピックス日本が次のステージに進んでいくに当たり、活動の理念の核心部分を検証するというアプローチの意義は大きいと信じています。もちろん、今回の検証だけでは不十分です。また、今回は検証できなかった家族や地域社会への効果という観点でのアプローチも実施されてしかるべきです。何年先になるかは分かりませんが、また大きな節目を迎えた段階で、改めて追跡調査の実施、あるいは別の視座からの検証などの試みが求められます。

国際オリンピック委員会（I O C）のジャック・ロゲ会長の「TOKYO」という一言を聞いた瞬間、日本中が歓喜に包まれました。2020年にオリンピック・パラリンピックというスポーツを通した平和の祭典で、感動や喜びをみなさまと共に享受できることは大きな楽しみです。スポーツ基本法も施行されました。また、東日本大震災が発生してから4年近くが立とうとしています。私たちは、復興に向けて「スポーツがもたらしてくれる喜び」が人々に与えるエネルギーというものは絶大であると感じています。

これらの相乗効果として、国内におけるスペシャルオリンピックス日本の認知度の向上、活動への理解の促進、アスリートやコーチ等の参加の促進なども期待しています。

謝辞

本調査研究プロジェクトには、全国の地区組織の事務局、アスリート、ボランティア、ファミリーにご協力いただきました。

また、34ページから51ページまでの調査研究の一部で科学研究費補助金（基盤C 21500611、24500765）を、調査の実施、本報告書作成においては全国生活協同組合連合会の助成を受けています。ここに記して謝意を表します。

スペシャルオリンピックス日本設立20周年の節目に、多くのSO仲間に関わられた幸運と喜びをわかち合えることに感謝して。

スペシャルオリンピックス日本20年の研究チーム 2014年12月

参考資料 1 スペシャルオリンピックスに関するこれまでの研究等

	著者・発表者	タイトル	掲載誌、巻(号)、年
1	Stein Julian U. [著], Klappholz Lowell A., 久米 和夫[他] [他訳]	スペシャルオリンピックス: Fitness and Conditioning(フィットネスとコンディショニング)	中央学院大学論叢, 一般教育関係 17(2), 33-37, 1982
2	小泉 東海雄 [訳], 白井 光治[訳] [訳]	イーナイスケネディ・ジュリアー: スペシャルオリンピックス(スイミング)	中央学院大学論叢, 一般教育関係 16(1), 73-135, 1982
3	Stein Julian U. [著], Klappholz Lowell A., 小泉 東海雄 [訳], 白井 光治	イーナイスケネディ・ジュリアー: スペシャルオリンピックス: Swimming(スイミング)	中央学院大学論叢, 一般教育関係 18(2), 63-119, 1983
4	Stein Julian U. [著], Klappholz Lowell A., 高橋 亮三[他] [他訳]	スペシャルオリンピックス: Volleyball(バレーボール)	中央学院大学論叢, 一般教育関係 18(2), 31-61, 1983
5	Stein Julian U., Klappholz Lowell A., 高橋 亮三[他]	スペシャルオリンピックス: Track and Field(陸上競技)	中央学院大学論叢, 一般教育関係 18(1), 49-96, 1983
6	Stein Julian U. [著], Klappholz Lowell A., 高橋 亮三[他] [他訳]	スペシャルオリンピックス: Track and Field(陸上競技)続	中央学院大学論叢, 一般教育関係 19(1), 101-159, 1984
7	仲野 隆士	スペシャルオリンピックスの組織構造とその活動に関する一考察	仙台大学紀要 27, 113-122, 1996
8	志村 健一	スペシャルオリンピックス・アスリートのファンクショナル・アビリティの測定に関する一考察: グループワークとしてのセラピューティック・レクリエーション	道都大学紀要, 社会福祉学部 19, 93-103, 1996
9	木谷 秀勝	「スペシャルオリンピックス」の現状と今後の方向性に関する一考察: スペシャルオリンピックスの活動と「1997 World Winter Games」の報告を中心として	九州女子大学紀要, 人文・社会科学編 34(1), 1-15, 1997
10	川西 正志	1997 Special Olympics World Winter Games in CANADA- 知的障害者のための冬季スペシャルオリンピックス世界大会をみて(1)-	体育の科学 47(6), 473-477, 1997
11	川西 正志	1997 Special Olympics World Winter Games in CANADA- 知的障害者のための冬季スペシャルオリンピックス世界大会をみて(2)	体育の科学 47(7), 570-573, 1997
12	庄子 元喜	障害者のスポーツ現場における柔道整復師の役割: スペシャルオリンピックス冬季ナショナル大会参加報告 第一報	柔道整復・接骨医学 5(4), 349, 1997
13	FRIEDMAN C., PERLMAN S.	スペシャルオリンピックスの口腔健康診査プログラムおよびその関連事業	障害者歯科 19, 256, 1998
14	井上 明浩, 加藤 泰樹	Participation in competitive sports for intellectually challenged people	体育・スポーツ哲学研究 22(1), 17-29, 2000
15	中村 靖子	この子と歩む(11)スペシャルオリンピックスと出会う	みんなのねがい (388), 40-43, 2000
16	FLEISCHER AB	1999 Special Olympics World Summer Games: Dermatologic health screening results	J Am Acad Dermatol 44, 700-703, 2001



	著者・発表者	タイトル	掲載誌、巻(号)、年
17	佐藤 充宏	知的障害者へのスポーツ支援と社会的価値の創造	徳島大学総合科学部人間科学研究 9, 21-38, 2001
18	大堀 孝雄, 新出 昌明	知的障害者スポーツ大会におけるボランティアの期待と充足に関する検討： スペシャルオリンピックス日本 第2回夏季ナショナルゲームを事例として	日本体育学会大会号 (52), 409, 2001
19	新出 昌明, 大堀 孝雄	知的障害者のスポーツ大会にボランティアとしてかかわることが障害者問題への 意識の醸成に及ぼす影響	日本体育学会大会号 (52), 408, 2001
20	富澤 めぐみ	スペシャルオリンピックスをご存知ですか?	アクトタイプ (6), 55-57, 2002
21	石渡 和美	スペシャルオリンピックスの展望 (2.オリンピックス憲章と人間学Ⅰ.研究論文報告)	茨城大学生涯学習教育研究センター報告 5, 15-17, 2002
22	柴田 幸男, 竹内 敏子, 小林 義雄	国際障害者スポーツチームアップメントと日本知的障害者卓球大会の一考察	中京大学教養論叢 44(1), 227-263, 2003
23	COTUGNA N.	Community health and nutrition screening for Special Olympics athletes	J. Community Health 28, 451-457, 2003
24	坪井 信二, 荒木 章純, 名和 弘幸 他	スペシャルオリンピックスにおける歯科的試み	障害者歯科 24(3), 381, 2003
25	今井 志保, 北村 尚浩, 川西 正志	スポーツボランティアの組織コミットメントと役割満足度： スペシャルオリンピックスのボランティアに着目して	日本体育学会大会号 (54), 242, 2003
26	仲野 隆士, 松本 耕二, 北村 尚浩, 國本 明徳	障害者スポーツにおけるボランティアコーチの参加動機： 2002 年スペシャルオリンピックス日本 夏季ナショナルゲーム選手団コーチを対象に	日本体育学会大会号 (54), 241, 2003
27	北村 尚浩, 松本 耕二, 國本 明徳, 仲野 隆士	スポーツボランティアの参加動機と組織コミットメント	日本体育学会大会号 (54), 240, 2003
28	仲野 隆士	スポーツと多文化共生：障害者スポーツの視点から	日本体育学会大会号 (54), 44, 2003
29	細川 佳代子	人流インタビュー--この人に聞く(35)知的障害者のスポーツ活動を支援する NPO「スペシャルオリンピックス日本」を主宰する細川佳代子さん	国際人流 16(6), 38-41, 2003
30	志村 健一	スペシャルオリンピックス日本 青森設立準備委員会の運営とその実践-- ソーシャルワーク実践とその教育的要素	弘前学院大学院社会学部社会学部福祉学教育研究所年報 (11), 101-105, 2003
31	坪井 信二, 名和 弘幸, 外山 敬久 他	スペシャルオリンピックス日本 愛知におけるヘルシーアスリートプログラムに参加した 知的障害者の歯科に関する生活習慣	障害者歯科 25(2), 177-181, 2004
32	細川 佳代子, 福西 七重	あやかり対談60分 細川佳代子さん(NPO法人スペシャルオリンピックス日本理事長) ナンバーワンではなくオンリーワンのためのオリンピック	月刊総務 42(12), 72-75, 2004

	著者・発表者	タイトル	掲載誌、巻(号)、年
33	笠原 哲三, 塩澤 誠士郎, 中村 太平, 他	2004年スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム長野: 第1報 歯科スタッフの役割とシステム	障害者歯科 25(3), 313, 2004
34	中村 太平, 塩澤 誠士郎, 笠原 哲三, 他	2004年スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム長野: 第2報 国内外的アスリートにおける歯科疾患調査	障害者歯科 25(3), 314, 2004
35	内田 育恵, 竹内 洋彦, MONTGOMERY Judy K., HERER Gilbert R.	知的発達障害者の聴覚スクリーニング: 2004年スペシャルオリンピックス日本長野大会からの報告	Audiology Japan 47(5), 387-388, 2004
36	小栗 謙一	本を読む 遠藤雅子「スペシャルオリンピックス」	青春と読書 39(3), 24-26, 2004
37	細川 佳代子, 谷口 智治	理事長対談 特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本 理事長 細川佳代子さん ハードのバリアフリーも大切だけれど、心のバリアフリーをあなたから	スクウェア21 (230), 16-19, 2004
38	(その他)	開催迫るスペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野	経済月報 (248), 22-25, 2004
39	鈴木 浩司, 川良 美佐雄, 福本 雅彦, 他	スペシャルオリンピックス日本冬季ナショナルゲーム長野における歯科的サポート活動: 特にフロアホッケーアスリートに作製したカスタムメイドマウスガードについて	スポーツ歯学 8(1), 57-63, 2005
40	北村 尚浩, 松本 耕二, 國本 明徳 [他], 仲野 隆士	スポーツボランティアの組織コミットメント	体育学研究 50(1), 37-57, 2005
41	中野 隆志, 村上 智則	コーチの立場からスペシャルオリンピックスを問う(身体運動の価値と可能性を探るI-スペシャル オリンピックスの取り組み, シンポジウム1, 体育方法, 専門分科会企画)	日本体育学会大会予稿集 (56), 93, 2005
42	井上 幹一	スペシャルオリンピックスの現状と課題(身体運動の価値と可能性を探るI-スペシャルオリンピックスの 取り組み, シンポジウム1, 体育方法, 専門分科会企画)	日本体育学会大会予稿集 (56), 93, 2005
43	松本 耕二, 城後 豊	身体運動の価値と可能性を探る [I] : スペシャルオリンピックスの取り組み(身体運動の価値と可 可能性を探るI-スペシャルオリンピックスの取り組み, シンポジウム1, 体育方法, 専門分科会企画)	日本体育学会大会予稿集 (56), 92, 2005
44	安川 英昭	スペシャルオリンピックス冬季世界大会を振り返って (S0大会と長野)	信州自治研 (160), 2-9, 2005
45	佐藤 英幸	スペシャルオリンピックスに参加して-Iハンディキャップをもつアスリートとの交流を通じて	マスコミ市民 (436), 78-81, 2005
46	有森 裕子, 細川 佳代子	KORONJリレー対談 世界を走るメダリストポランティア- 有森裕子氏(五輪メダリスト) VS 細川佳代子氏(スペシャルオリンピックス日本・理事長)	月刊公論 38(2), 26-33, 2005
47	細川 佳代子, 山谷 えり子	KORONJリレー対談 知的発達障害者オリンピックスを成功させよう-05:2月にS0冬季世界大会・長 野-I-スペシャルオリンピックス日本理事長 細川佳代子氏 VS 参議院議員 山谷えり子氏	月刊公論 38(1), 34-40, 2005
48	(その他)	グラフィア Special Olympics--2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野	みんなのなかい (455), 2-4, 2005



	著者・発表者	タイトル	掲載誌、巻(号)、年
49	田引俊和	知的障害者スポーツ活動を支えるボランティアの参加動機に関する研究	医療福祉研究第1号, 85-93, 2005
50	田引俊和	知的障害のある人たちとスペシャルオリンピックス (特集 彼たちのスタートライン-スポーツ・仕事・仲間) -- (できること、いっぱい!)	福祉のひろば 58(423), 19-21, 2005
51	渡邊 浩美	障害者スポーツの社会的可能性	立教大学21世紀社会デザイン研究 (5), 135-144, 2006
52	楠田 稯, 中村 太平, 小林 譲 他	2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会: 第7報 ボランティア活動前後の障害者へのイメージ	障害者歯科 27(3), 458, 2006
53	中村 太平, 小林 譲, 松本 信久 他	2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会: 第6報 ボランティア活動	障害者歯科 27(3), 393, 2006
54	仲野 隆士, 柳 久恒, 北村 尚浩, 松本 耕二, 吉田 正	2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会・長野におけるイベント・ボランティアのマネジメント研究: イベント・ボランティア経験の違いに着目して	日本体育学会大会予稿集 (57), 104, 2006
55	細川 佳代子, 浅野 史郎	浅野史郎の疾走対談(2)スペシャルオリンピックス--「とびきりの社会」に近づくためのヒント	世界 (755), 56-64, 2006
56	青江 智子, 広田 孝子, 池田 晴佳 [他]	スペシャルオリンピックスに参加する知的発達障害者における骨密度の実態調査と低骨密度改善のための指導 (第27回(石本記念)デサントスポーツ科学振興財団)助成研究報告)	デサントスポーツ科学 27, 208-216, 2006
57	外崎 美香	<修士論文要旨>地域福祉推進におけるスペシャルオリンピックスの意義	修士論文抄録集 (1), 41-44, 2006
58	飯島 泰臣	インタビュールーム(657)飯島泰臣さん(四〇)「スペシャルオリンピックス日本・長野」 会長 スポーツ通じ、知的障害者の社会参加を支援	厚生福祉 (5354), 13, 2006
59	細川 佳代子	NPO法人スペシャルオリンピックス日本 理事長 細川佳代子氏に聞く(上) 知的障害のある人の可能性信じて	週刊教育資料 (925), 3-5, 2006
60	細川 佳代子	NPO法人スペシャルオリンピックス日本 理事長 細川佳代子氏に聞く(下) 共生の感性は子どものうちに	週刊教育資料 (926), 3-5, 2006
61	小泉 典章	メンタルヘルスの広場 スペシャルオリンピックスを通して、障害者スポーツの発展を考える	心と社会 37(1), 88-93, 2006
62	荒井 弘和, 中村 友浩	知的障害のある者の親がアダプテッド・スポーツプログラムに参加することによる感情の変化	体育学研究51, 6, 793-799, 2006
63	荒井 弘和, 中村 友浩	知的障害のある者の親を対象とした運動習慣とメンタルヘルスの関連	日本体育学会大会予稿集57, 233, 2006
64	望月 浩一郎	日本の障害者スポーツと法をめぐる現状と課題	身体教育医学研究 8(1), 1-11, 2007
65	齋藤 理恵子, 山村 清美, 水澤 愛 他	スペシャルオリンピックスにおける地域での活動: 塩尻でのスペシャルスマイルズ活動	障害者歯科 28(3), 552, 2007

	著者・発表者	タイトル	掲載誌, 巻(号), 年
66	松本 信久, 小笠原 正, 坪井 信二 他	2006年 第4回スペシャルオリンピックス日本 夏季ナショナルゲーム 熊本: 第2報 スペシャルスマイルズプログラム参加アスリートの口腔状況とRDテストとの関係	障害者歯科 28(3), 549, 2007
67	前淵 隆子, 高柳 徳子, 山口 八重子 他	2006年 第4回スペシャルオリンピックス日本 夏季ナショナルゲーム 熊本: 第3報 ボランティアへのアンケート	障害者歯科 28(3), 550, 2007
68	松岡 拓治, 松本 信久, 規工川 浩 他	2006年 第4回スペシャルオリンピックス日本 夏季ナショナルゲーム 熊本: 第4報 スペシャルスマイルズの準備から実施まで	障害者歯科 28(3), 551, 2007
69	細谷 一博	「スペシャルオリンピックス日本 新潟: 上越 妙高プログラム」の取り組み	上越教育大学障害児教育実践センター 紀要 13, 57-58, 2007
70	小森 亜紀子	スペシャルオリンピックスおよびそのボランティアの社会的意義- 「500万人トーチラン」および2005年冬季世界大会-長野の事例を中心に	日本ボランティア学会誌 2007年度, 114-130, 2007
71	細川 佳代子	スペシャルオリンピックスから学んだこと-可能性への挑戦 (生涯学習大学 清泉ラファエラ・アカデミア)	清泉文苑 (24), 133-144, 2007
72	Suzuki H, Kawara M, Tanaka Y, Mega J, Takanashi H.	Custom-made mouth guards for Special Olympics athletes.	Spec Care Dentist.27(4),125-6,2007
73	田引 俊和	One Thought about Sports Activities for Persons with Intellectual Disability	10th International ASAPE Symposium, Abstracts 118,2008
74	山下 大介, 辻本 尚弥, 満園 良一	障害者スポーツの位置づけ-歴史的背景と社会学的研究および生理学的研究について	久留米大学健康スポーツ科学センター研究紀要 16, 1-9, 2008
75	Nakajima K, Henda J, Takeda T, Ishigami K	Report by the medical volunteers who participated in the 2005 special olympics	International journal of sports dentistry 1(1), 61-65, 2008
76	(その他)	グラビア Special Olympics--2005年スペシャルオリンピックス冬季世界大会-長野	厚生福祉 (5525), 14, 2008
77	雷田 滋, 遠藤 隆一, 宮城 敦 他	2008年スペシャルオリンピックス日本 冬季ナショナルゲーム 山形: 第1報 スペシャルスマイルズプログラム参加アスリートの歯科疾患調査	障害者歯科 29(3), 338, 2008
78	坪井 信二, 永田 秀昭, 五十嵐 雄一 他	2008年スペシャルオリンピックス日本 冬季ナショナルゲーム 山形: 第2報 スペシャルスマイルズプログラム参加ボランティアの意識調査	障害者歯科 29(3), 339, 2008
79	遠藤 雅子	スペシャルオリンピックスの熱気と反響 知的発達障害者の自立支援を	公明 (31), 40-45, 2008
80	赤羽 勝司, 社団法人熊本県理学療法士協会	スペシャルオリンピックスにおける健診事業の結果と理学療法士の課題 (骨・関節系理学療法, 一般演題(ポスター発表演題), 第43回日本理学療法学会大会)	理学療法学 35(Supplement_2), 311, 2008
81	(その他)	地域を支える(578)スペシャルオリンピックス日本 熊本 (NPO法人 熊本市) 知的障害者のスポーツを支える	厚生福祉 (5525), 14, 2008



	著者・発表者	タイトル	掲載誌、巻(号)、年
82	田引俊和	障害者スポーツを支えるボランティアの参加動機に関する研究	医療福祉研究第4号, 98-107, 2008
83	田引俊和	One Thought about Volunteers who Support Sports Activities for Persons with Intellectual Disability	2009 International Symposium of Adapted Physical Activity Abstracts 2009
84	Fung Lena, Tsai Eva	The Hong Kong Law Enforcement Torch Run: An Exploration of Officers' Participation Motives	International Journal of Sport and Health Science 7, 1-5, 2009
85	岡本卓真, 加藤孝明, 佐々真由子 他	スペシャルオリンピックス日本 愛知におけるヘルシーアスリートプログラムでの歯科保健活動の成果	障害者歯科 30(3), 367, 2009
86	勝田泉, 小林博昭, 葦村伸児 他	地域開権のスペシャルオリンピックスに参加したボランティアの意識	障害者歯科 30(3), 208, 2009
87	小林博昭, 勝田泉, 葦村伸児 他	スペシャルオリンピックスにおけるマウスガードの認知度と使用経験	障害者歯科 30(3), 207, 2009
88	岡川 曉	第2回日中国際シンポジウム報告 第1報	日本福祉大学健康科学論集 12, 49-56, 2009
89	盧 学軍	みんなに賞がある人は皆勝利者である-第12回夏季スペシャルオリンピックス世界大会(第2回日中国際シンポジウム報告(第1報))	日本福祉大学健康科学論集 12, 51-53, 2009
90	細谷一博, 久保田 健	地域の情報 スペシャルオリンピックス日本-新潟の取り組み-各地域の紹介と組織運営	上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要 15, 47-49, 2009
91	荒井 弘和, 中村 友浩	家族で参加するアダプテッドスポーツプログラムに伴う精神的健康の変化: 知的障害者の親を対象として	障害者スポーツ科学 7, 155-60, 2009
92	荒井 弘和, 中村 友浩	知的障害者の親における身体活動・運動実施の阻害要因と促進要因	体育学研究 54, 1, 213-219, 2009
93	田引俊和	障害者スポーツを支えるボランティアの意識の特徴に関する一考察	北陸学院大学-北陸学院大学短期大学部研究紀要1号, 241-249, 2009
94	田引俊和	Analysis of perceptions held by volunteers participating in sports activities for persons with disabilities	11th International ASAPE Symposium, Abstract 34p, 2010
95	井上 明浩	2009スペシャルオリンピックス冬季世界大会の状況と今後の国内の展望	金沢星稜大学人間科学研究 3(2), 57-62, 2010
96	小笠原 正, 岡田 芳幸, 松尾 浩一郎 他	スペシャルオリンピックス・フロアホッケーのアスリートにおけるマウスガードの認知度と使用経験	障害者歯科 31(1), 72-77, 2010
97	志村 健一	主体形成支援とグループワーク-インターグループカウンシルを媒介としたスペシャルオリンピックス冬季世界大会日本選手団を手がかりに(特集 グループを支援するソーシャルワーク実践再考)	ソーシャルワーク研究 36(1), 24-33, 2010
98	岡田 尚則, 真座 孝, 松島 一夫 他	スペシャルオリンピックス日本-沖縄: 第1報 ヘルシーアスリートプログラム参加者の歯科に関する生活習慣	障害者歯科 31(3), 691, 2010

	著者・発表者	タイトル	掲載誌, 巻(号), 年
99	島田 茂, 長瀬 忍, 波平 真樹 他	スペシャルオリンピックス日本・沖縄: 第2報 アスリート関係者の歯科についての関心度	障害者歯科 31(3), 692, 2010
100	勝連 義之, 島袋 のぞみ, 川畑 剛 他	スペシャルオリンピックス日本・沖縄: 第3報 ボランティアの意識調査	障害者歯科 31(3), 693, 2010
101	田引 俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	障害者スポーツを支えるボランティアスタッフの意識の特徴に関する分析	日本体育学会大会予稿集 (61), 299, 2010
102	清水 高	あの人を訪ねたい 細川佳代子 スペシャルオリンピックス日本名誉会長	石垣 29(12), 8-10, 2010
103	田引 俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	Motives for participation among Special Olympics volunteers	18th International Symposium of Adapted Physical Activity Abstracts 254p, 2011
104	横峯 弘隆, 岩田 一夫, 武藤 興紀	スペシャルオリンピックスにおける眼科検診の必要性について: 医療ボランティア活動と調査を通して	Japanese orthoptic journal 40, 173-177, 2011
105	日出嶋 康博, 大木 淳一, 山岸 聡史 他	スペシャルオリンピックス日本・富山におけるヘルシーアスリートプログラム: 第1報 アスリートの歯科疾患罹患状況	障害者歯科 32(3), 410, 2011
106	金田 渚, 大木 淳一, 山岸 聡史 他	スペシャルオリンピックス日本・富山におけるヘルシーアスリートプログラム: 第2報 ボランティアの意識調査	障害者歯科 32(3), 411, 2011
107	松川 綾子, 藤代 千晶, 藤川 順同 他	2010年第5回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム大阪 第一報: 第4回(2006年)参加アスリートの口腔内状況との比較	障害者歯科 32(3), 343, 2011
108	橋場 佳子, 秋山 茂久, 松川 綾子 他	2010年第5回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム大阪 第二報: ボランティアへのアンケート	障害者歯科 32(3), 344, 2011
109	小森 亜紀子	知的発達障害児に対する意識の男女差: 交流体験による変化	昭和女子大学女性文化研究所紀要 38, 15-26, 2011
110	水内 豊和, 熊田 美和, 松倉 可奈	知的障害者に対する健康・運動についての自己意識向上に関する実践研究	教育実践研究 (5), 85-90, 2011
111	勝二 博亮	スペシャルオリンピックス日本における地区組織での取り組み: 一設立年数と活動規模の違い—	特殊教育学研究 49(3), 273-282, 2011
112	田引 俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	障害者スポーツ参加者の意識の特徴に関する分析	日本体育学会大会予稿集 (62), 295, 2011
113	水内 豊和, 熊田 美和	スペシャルオリンピックス・アスリートの地域生活状況: 富山県における調査から(アダプテッドスポーツ for ALL)自ら創り発信する, 次のステップへ, <特集>第31回医療体育研究会/第14回アジア障害者体育・スポーツ学会日本部会第12回合同大会)	リハビリテーション・スポーツ 30(1), 59-60, 2011
114	田引 俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	障害者のスポーツ活動に携わるボランティアスタッフの意識の特徴に関する一考察(アダプテッドスポーツ for ALL)自ら創り発信する, 次のステップへ, <特集>第31回医療体育研究会/第14回アジア障害者体育・スポーツ学会日本部会第12回合同大会)	リハビリテーション・スポーツ 30(1), 54, 2011
115	島 雅人 奥田 邦晴, 片岡 正教 他	知的障がい・スポーツ選手に対する身体機能検査の試み(原書論文)	日本障害者スポーツ学会誌, 20号, 32-37, 2011



	著者・発表者	タイトル	掲載誌、巻(号)、年
116	田引俊和	障害者スポーツに携わるボランティアの知的障害者に対する意識に関する調査研究	日本体育学会北陸体育学会紀要第47号, 21-30, 2011
117	田引俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	Analysis of reasons for participation in sports activities targeted at persons with intellectual disabilities	The 12th Asia Society of Adapted Physical Education and Exercise Symposium, Abstracts 20p, 2012
118	大山 祐太, 増田 貴人, 安藤 房治	知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアの継続参加プロセス : スペシャルオリンピックス日本・青森の事例から	障害者スポーツ科学 10(1), 35-44, 2012
119	井上 明浩	2011年スペシャルオリンピックス夏季世界大会の状況と国内未普及競技の展望	金沢星稜大学人間科学研究 5(2), 45-53, 2012
120	鳥 雅人, 奥田 邦晴, 岩田 秀治 他	重度知的障がい及び知的と身体機能との重複障がい者(児)に対する運動機能向上に向けたトレーニングの実践報告 : 一理学療法士が手掛ける知的障がい者の社会参加支援活動—	日本理学療法学会大会 2011(O), Ed1467-Ed1467, 2012
121	田引俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	障害者スポーツ参加者の意識の特徴に関する分析	日本体育学会大会予稿集 (63), 317, 2012
122	井上 明浩	スペシャルオリンピックス日本における未普及競技への取り組みに向けて : 2011年スペシャルオリンピックス夏季世界大会・アテネの状況から(リハビリテーション・スポーツ・アダプテッド・スポーツ : そのひろがり)とつながり<特集>第32回医療体育研究会/第15回日本アダプテッド・スポーツ学会第13回合同大会兼第7回茨城県障害者スポーツ研究会	リハビリテーション・スポーツ 31(1), 38, 2012
123	佐々木 重夫, 福島 雅啓, 柴原 栄一郎 他	スペシャルオリンピックスに参加して(その1) ボランティア活動の概要(会議録)	奥羽大学歯学誌, 39巻3号, 187-188, 2012
124	佐々木 重夫, 釜田 朗, 大橋 綾子 他	スペシャルオリンピックスに参加して(その2) ボランティア・スタッフの意識調査(会議録)	奥羽大学歯学誌, 39巻3号, 188, 2012
125	佐々木 重夫, 島村 和宏, 福島 雅啓 他	スペシャルオリンピックスにおけるボランティア活動(会議録)	障害者歯科, 33巻3号, 417, 2012
126	植木 公一, 柴田 えり子, 齋藤 眞目 他	公益財団法人スペシャルオリンピックス日本の報告 神奈川県在住のアスリート連へのメディアカルサポート(第1報)(会議録)	日本スポーツ歯科医学会学術大会プログラム抄録集23回, 2012
127	佐々木 重夫, 釜田 朗, 河合 宏仁 他	知的障害者に対するボランティア・スタッフの意識調査 スペシャルオリンピックスにおけるアンケートから(会議録)	日本歯科医療管理学会雑誌, 47巻1号, 47, 2012
128	田引俊和, 松本 耕二, 仲野 隆士, 渡邊 浩美	Recognition survey of Special Olympics members	19th International Symposium of Adapted Physical Activity, Abstracts 188p, 2013
129	井上 明浩	香港の障害者スポーツ協会に関する研究 : 香港弱智人士體育協會並びにスペシャルオリンピックス香港について	金沢星稜大学人間科学研究 6(2), 43-48, 2013
130	溝部 佳子, 中野 ひとみ	6年間の「ボランティア」講座の取り組み : 平成23年度スペシャルオリンピックス(SO)日本・大分の開催校として(相良好仁先生 追悼号)	別府清部学園短期大学紀要 (33), 29-35, 2013
131	志賀 真珠美, 荒井 弘和	スペシャルオリンピックスのボランティア・コーチの活動に関連する要因	スポーツ産業学研究 23(2), 2_241-2_247, 2013

	著者・発表者	タイトル	掲載誌, 巻(号), 年
132	田引 俊和, 松本 耕二, 仲野 隆士, 渡邊 浩美	障害がある人たちの継続的なスポーツ活動の効果に関する一考察	日本体育学会大会予稿集 (64), 401-402, 2013
133	岡川 暁	教養教育の一環としてのスペシャルオリンピックス体験に関する考察(一般演題, 地域に根ざすリハビリテーションスポーツ, アダプテッドスポーツ, <特集>第33回医療体育研究会/第16回日本アダプテッド体育・スポーツ学会第14回合同大会)	リハビリテーション・スポーツ 32(1), 23, 2013
134	田引 俊和, 松本 耕二, 仲野 隆士, 渡邊 浩美	知的障害者のスポーツ活動に関する調査研究(一般演題, 地域に根ざすリハビリテーション・スポーツ, アダプテッドスポーツ, <特集>第33回医療体育研究会/第16回日本アダプテッド体育・スポーツ学会第14回合同大会)	リハビリテーション・スポーツ 32(1), 18, 2013
135	富島 磨由美	障がい者の自立と社会参加における調査と研究: 知的障がい者の自立と社会参加支援	太成学院大学紀要 15, 225-230, 2013
136	中村 年延	お母さんと二人三脚で励む: 目標はスペシャルオリンピックス世界大会出場	ノーマライゼーション: 障害者の福祉 33(2), 1-4, 2013
137	田引 俊和, 松本 耕二, 渡邊 浩美	知的障害のある人たちがスポーツ活動に参加する理由	北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要 (6), 141-148, 2013
138	Arai Hirokazu	Relationships between Self-efficacy and Collective Efficacy at the Family/Community Level and Mental Health among Families of Special Olympics Athletes	International Journal of Sport and Health Science, 2014
139	伊藤 セツ	新刊紹介 小森亜紀子著「スペシャルオリンピックスがソーシャル・インクルージョンに果たす役割 -学校連携プログラムにおける交流経験を中心に-	學苑 881, 152-153, 2014



参考資料 2 スペシャルオリンピックスの理念

1. スペシャルオリンピックスは、知的障害のある人々が、個人スポーツ、チームスポーツにかかわらず、適切な指導と励ましのもとでスポーツに参加することにより、学習すること、楽しむこと等の効果があると信じています。これらのスポーツは知的、身体的な制限がある人たちのニーズに応えるための場合にのみ変更されるものです。
2. スペシャルオリンピックスは、一貫したトレーニングが、個人の成長のために欠くことのできないものだと思っています。それはスポーツ技術だけでなく、一個人としての成長のための動機づけという観点からです。一貫したトレーニングというのは、その技術の向上レベルを計る最も適切な方法として、同程度の技術、技量のアスリートと競技することを含んでいます。
3. スペシャルオリンピックスは、スポーツのトレーニングと競技に参加することが、知的障害のある人々にとって身体的、知的、社会的、そして精神的に効果があると信じています。また、スペシャルオリンピックス参加の効果はアスリートだけでなく、家族の絆が強くなり、地域社会も参加、見学により、知的障害のある人々を理解し、尊敬し、受け入れるという効果があるとも信じています。

参考資料 3 スペシャルオリンピックス／

スペシャルオリンピックス日本のあゆみ

- | | |
|-----------|--|
| 1962年6月 | ユニス・ケネディ・シュライバーが、メリーランドの自宅の裏庭で知的障害のある人たちにスポーツや身体活動を提供するデイキャンプを始めた。 |
| 1964～68年 | ケネディ財団の助成によりアメリカ全土で同様のデイキャンプが開催された。 |
| 1968年7月 | シカゴのソルジャー競技場に26州とカナダから1000人のアスリートが参加し、第1回国際スペシャルオリンピックス大会が開催された。 |
| 1968年12月 | スペシャルオリンピックスが設立。オリンピックの伝統と精神を基に、組織として活動を開始した。 |
| 1971年12月 | アメリカオリンピック委員会より正式に「オリンピック」の名称を受ける。 |
| 1975年8月 | 第4回国際大会はCBS放送が全米ネットで大会を放映した。 |
| 1977年2月 | 第1回冬季国際大会（コロラド州スチームボートスプリングス500名）開催。 |
| 1983年7月 | 第6回国際大会がルイジアナ州で開催。日本選手団68名が参加。 |
| 1987年7～8月 | 第7回国際大会がインディアナ州で開催。 |
| 1988年2月 | 国際オリンピック委員会（IOC）と国際本部が、「オリンピック」の名称使用や相互の活動を認め合う議定書を交わす。 |

- 1991年7月 第8回スペシャルオリンピックス夏季世界大会がミネソタ州で開催。
(この大会以降、国際大会から世界大会に名称が変わった。)
- 1997年1月 ヘルシー・アスリート・プログラム[®]が正式にスペシャルオリンピックスの活動の一つとなった。
- 2009年8月 創設者 ユニス・ケネディ・シュライバー逝去。
- 2011年1月 元会長 サージェント・シュライバー逝去。

参考資料4 スペシャルオリンピックス日本のあゆみ

- 1980年5月 日本スペシャルオリンピックス委員会が国際本部より認定を受ける。
- 1981年10月 第1回日本スペシャルオリンピックス全国大会(神奈川)開催。
- 1982年10月 第2回日本スペシャルオリンピックス全国大会(東京)開催。
- 1992年5月 日本スペシャルオリンピックス委員会解散。
- 1992年7月 スペシャルオリンピックス説明会実行委員会が熊本で発足。
- 1992年10月 スペシャルオリンピックス説明会開催(熊本市)。
- 1993年1月 ボランティアコーチ研修会を行い、その後、熊本県内でスポーツプログラム活動が始まる。
- 1993年2月 国際本部より、熊本の有志に対し、新たな国内本部組織設立の要請がある。
- 1993年3月 スペシャルオリンピックス熊本設立。スペシャルオリンピックス日本設立準備会発足。国際本部のはからいで、第5回冬季世界大会(オーストリア・ザルツブルグ)に選手を派遣。
- 1994年10月 スペシャルオリンピックス東京設立。
- 1994年11月 スペシャルオリンピックス日本設立(会長 細川佳代子)。
- 1995年3月 第1回スペシャルオリンピックス日本夏季ナショナルゲーム(熊本)開催。
- 1995年7月 第9回夏季世界大会(コネチカット州)に日本選手団30名を派遣。
- 1995年8月 第1回ナショナルミーティング開催(熊本)。
- 1996年2月 第1回冬季ナショナルゲーム(アルペンスキー宮城大会)開催。
- 1996年5月 第1回冬季ナショナルゲーム(スケート福岡大会)開催。
- 1997年2月 第6回冬季世界大会(カナダ・トロント)に日本選手団17名を派遣。
- 1998年8月 第2回夏季ナショナルゲーム神奈川大会開催。
- 1999年6月 第10回夏季世界大会(アメリカ・ノースカロライナ)に日本選手団45名を派遣。
- 2000年2月 第2回冬季ナショナルゲーム長野大会開催。
- 2001年2月 第7回冬季世界大会(アメリカ・アラスカ)に日本選手団16名を派遣。
- 2001年5月 内閣府より特定非営利活動法人の認定証交付。特定非営利活動(NPO)法人スペシャルオリンピックス日本設立(理事長 細川佳代子)。

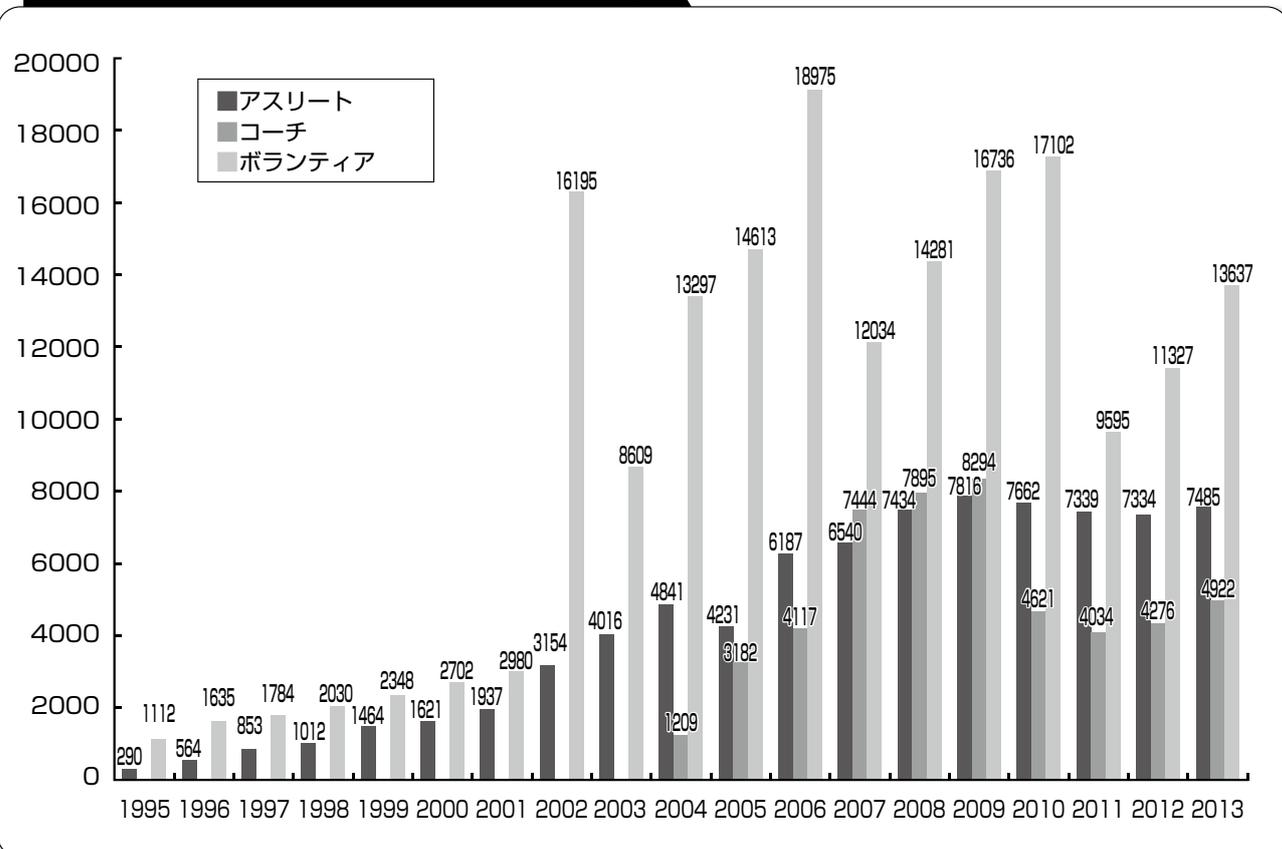
- 2002年8月 第3回夏季ナショナルゲーム・東京開催。
- 2003年6月 第11回夏季世界大会(アイルランド・ダブリン)に日本選手団77名を派遣。
- 2004年2月 第3回冬季ナショナルゲーム・長野開催。
- 2005年2月 第8回冬季世界大会を長野で開催(日本選手団150名を派遣)。
- 2006年7月 認定NPO法人として国税庁より認定を受ける。
- 2006年11月 第4回夏季ナショナルゲーム・熊本開催
- 2007年10月 第12回夏季世界大会(中華人民共和国・上海)に日本選手団120名を派遣。
- 2007年12月 東京都より特定非営利活動法人の認定証交付(熊本県から東京都に本部を移転したため認証先が変更となった)。
- 2008年3月 第4回冬季ナショナルゲーム・山形開催。
- 2009年1月 スペシャルオリンピックスの活動が、47都道府県(36地区組織、11設立準備委員会)に広がる。
- 2009年2月 第9回冬季世界大会(アメリカ・アイダホ)に日本選手団87名を派遣。
- 2010年11月 第5回夏季ナショナルゲーム・大阪開催。
- 2011年7月 第13回夏季世界大会(ギリシャ共和国・アテネ)に日本選手団75名を派遣。
- 2012年2月 第5回冬季ナショナルゲーム・福島開催。
- 2012年4月 公益財団法人スペシャルオリンピックスに組織変更。
- 2013年2月 第10回冬季世界大会(大韓民国・ピョンチャン)に日本選手団84名を派遣。
- 2013年11月 第1回SOアジア太平洋大会(オーストラリア連邦・ニューキャッスル)に日本選手団45名を派遣。
- 2014年11月 第6回夏季ナショナルゲーム・福岡開催。

出典:スペシャルオリンピックス日本ゼネラルオリエンテーション標準テキスト(2014)

参考資料5 スペシャルオリンピックス日本の活動推移

※本活動推移は、SON事務局地区組織活動調査の統計に基づいている。

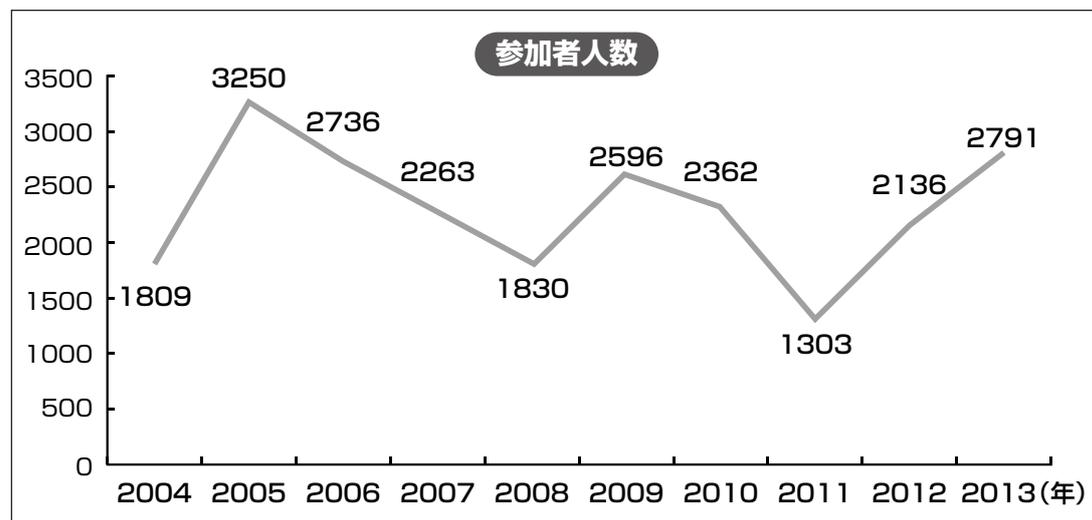
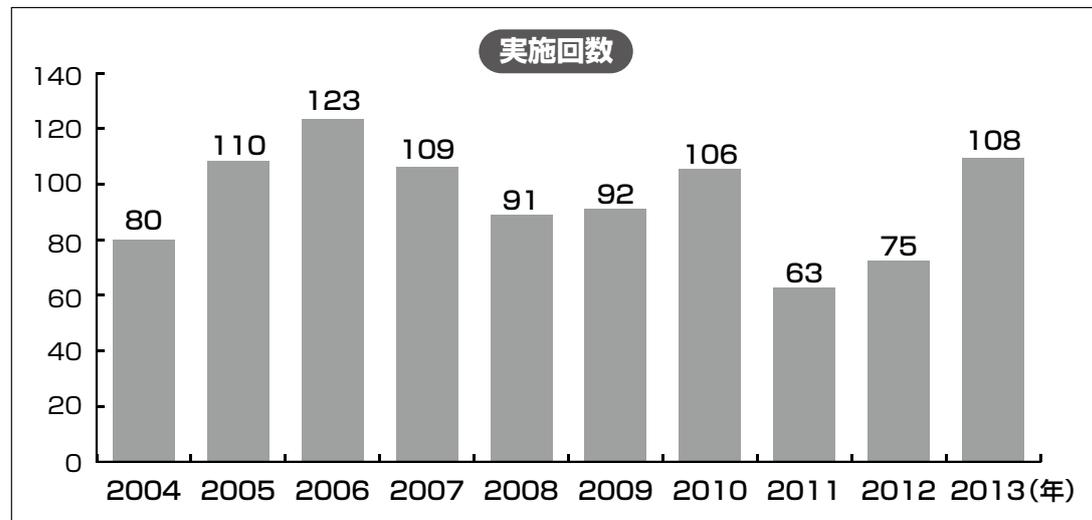
アスリート、コーチボランティア人数の推移



SONアスリート/ コーチ/ ボランティア人数			
年度	アスリート	コーチ	ボランティア
1995	290	統計無し	1112
1996	564	統計無し	1635
1997	853	統計無し	1784
1998	1012	統計無し	2030
1999	1464	統計無し	2348
2000	1621	統計無し	2702
2001	1937	統計無し	2980
2002	3154	統計無し	16195
2003	4016	統計無し	8609
2004	4841	1209	13297
2005	4231	3182	14613
2006	6187	4117	18975
2007	6540	7444	12034
2008	7434	7895	14281
2009	7816	8294	16736
2010	7662	4621	17102
2011	7339	4034	9595
2012	7334	4276	11327
2013	7485	4922	13637



コーチクリニック実施状況



年度	実施回数	年度	参加者数
2004年	80	2004年	1809
2005年	110	2005年	3250
2006年	123	2006年	2736
2007年	109	2007年	2263
2008年	91	2008年	1830
2009年	92	2009年	2596
2010年	106	2010年	2362
2011年	63	2011年	1303
2012年	75	2012年	2136
2013年	108	2013年	2791

ナショナルゲーム開催実績

	開催地	選手団構成			
		アスリート	役員	コーチ他	
1995年第1回 夏季ナショナルゲーム熊本大会	熊本県熊本市	アスリート	137名	役員	コーチ他 64名
1996年第1回 冬季ナショナルゲーム宮城大会	宮城県蔵王町	アスリート	34名	役員	コーチ他 17名
1996年第1回 冬季ナショナルゲーム福岡大会	福岡県福岡市	アスリート	45名	役員	コーチ他 21名
1998年第2回 夏季ナショナルゲーム神奈川大会	神奈川県 平塚市	アスリート	194名	役員	コーチ他 134名
2000年第2回 冬季ナショナルゲーム長野大会	長野県長野市、 牟礼村	アスリート	121名	役員	コーチ他 81名
2002年第3回 夏季ナショナルゲーム・東京	東京都内	アスリート	816名	役員	コーチ他 546名
2004年第3回 冬季ナショナルゲーム・長野/ 2005年SO冬季世界大会・ブレ大会	長野県長野市、 牟礼村、山ノ 内町、白馬村	アスリート エファイパートナー	620名 24名	役員	コーチ他 393名
2006年第4回夏季ナショナル ゲーム・熊本	熊本県熊本市、阿 蘇市、南阿蘇村	アスリート	1016名	役員	コーチ他 560名
2008年第4回 冬季ナショナルゲーム・山形	山形県山形市	アスリート	566名	役員	コーチ他 330名
2010年第5回 夏季ナショナルゲーム・大阪	大阪府大阪市、吹田市、 門真市、茨木市、堺市	アスリート	1042名	役員	コーチ他 591名
2012年第5回 冬季ナショナルゲーム・福島	福島県郡山市、 猪苗代町	アスリート	574名	役員	コーチ他 320名
2014年第6回 夏季ナショナルゲーム・福岡	福岡県福岡市、北九州市、 宗像市、古賀市、粕屋市	アスリート	975名	役員	コーチ他 593名

世界大会派遣実績

		派遣人数	参加者内訳			
			アスリート	役員	コーチ	
1995年 第9回 夏季大会	アメリカ/ コネチカット州	30名				
1997年 第6回 冬季大会	カナダ/トロント	17名				
1999年 第10回 夏季大会	アメリカ/ ノースカロライナ州	45名				
2001年 第7回 冬季大会	アメリカ/ アラスカ州	16名	アスリート	10名	役員	コーチ 6名
2003年 第11回 夏季大会	アイルランド/ ダブリン	77名	アスリート	53名	役員	コーチ 24名
2005年 第8回 冬季大会	日本/長野県	150名	アスリート	109名	役員	コーチ 41名
2007年 第12回 夏季大会	中国/上海	120名	アスリート	120名	役員	コーチ 82名
2009年 第9回 冬季大会	アメリカ/ アイダホ州	87名	アスリート	61名	役員	コーチ 26名
2011年 第13回 夏季大会	ギリシャ共和国/ アテネ	75名	アスリート	52名	役員	コーチ 23名
2013年 第10回 冬季大会	韓国江原道/ 平昌(ピョンチャン)	84名	アスリート	59名	役員	コーチ 25名

.....

スペシャルオリンピックス日本 20 年の検証 設立 20 周年記念調査研究報告書



発行日：2014 年 12 月 25 日

発行者：公益財団法人スペシャルオリンピックス日本

〒 105-0003 東京都港区西新橋 2-22-1

西新橋 2 丁目森ビル 7 階

TEL：03-6809-2034 FAX：03-3436-3666

URL <http://www.son.or.jp>

表紙デザイン協力： 宮尾純平

企画・制作：スペシャルオリンピックス日本研究チーム・

スペシャルオリンピックス日本事務局

印刷：常川印刷株式会社

〒 460-0012 名古屋市中区千代田二丁目 18-17

TEL：052-262-3028

